
きーどあいらっく！

倉石さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きーどあいらつく！

【Nコード】

N1173Y

【作者名】

倉石さん

【あらすじ】

夜永 契は平凡な日常の最中、何の前触れもなく両親を殺される。狂おしい程の感情の奔流に苛まれる中、目の前に現れたのは淫魔（本人談）だった。

淫魔は契に取引を持ちかける。

淫魔との契約の代償に契は少女、リンを護る事になる。

そしてそれは契約の代償で有り報酬でもあった。

リンが貴方の望みへと導いてくれる。

それが淫魔の残していった言葉だった。

彼が契約と同時に失ってしまった鍵とは一体何なのか。
そして彼以外に現れる4人の契約者の少女達。
リンを追う謎の組織。

全ては彼の知らない所で起こった、とある出来事に帰結する。

これは自称ロリコンの高校生、契が契約と共に力を駆使して一人の少女を護る、愛と復讐のお話。

このお話には多少主人公無双成分が含まれています。
また現実での兵器等多少血なまぐさい表現もございますので
免疫耐性等お持ちで無い方はブラウザの戻るを推奨いたします。

11月4日を持ちまして、第一幕がほぼ完結致しました。
貯蔵分が尽きたのでこれからの更新は多分最大最速で2日に1回っ
て所に成ると思います。が今後ともお付き合い頂けると幸いです。

第一幕 『ぷるろーぐ』（前書き）

このお話はフィクションです。

現実に存在する人物、国家、組織、団体等とは一切関係ありませんのでご了承ください。

第一幕までは書きためた物があるのでさくさく更新して行きます。

その先は……わかりません。

尚、誤字脱字当りましたら感想等で報告して頂けると大変ありがたいです！

第一幕 『ぶろろーく』

空を見上げる。

いや、見上げる必要性など本来は存在しない。

校舎の屋上に立つ自らの瞳と、空とを隔てる様な建築物などこの街には存在しないのだから。

しかし、この時の空を見上げるといふ行為は、その行動を起因した自己の感情と相對するため無意識下で行われる動作であり、別段、蒼白く光を纏う満月や、申し訳程度に散然と輝く星達に対して美辭麗句を並べる為に行われた物ではない。

だが、自己の感情と相對する、という観点からもこの行動は矛盾を孕む事になるだろう。

それを示唆するかの如く、屋上の鉄柵に手を掛け立ちつくす俺の横でぺったりと冷えたコンクリートに座り込んだ少女がこちらを不思議そうに見つめている。

幼さの残る上目遣いの瞳は純粹で、一切の穢れを含まない。

月の光を受けた真っ直ぐな銀系の頭髮は夜風に揺れる度に光の粒子を振りまくような錯覚さえ抱かせる。

だがそんな彼女の瞳を見ると、やはり想像してしまうのだ。
まるでそう

一致するはずの鍵穴に、差し込んだ鍵がつかえた時のような違和感。

単純に言えば、期待を裏切られた際に人間が見せる瞳。

人の視線から読み取れる感情なんて、ほとんどが被害妄想だ。

自分がそう思っているから、そう感じてしまう程度の物。

本人の考えつく事が出来た可能性の中から選びとった一つの答えに過ぎない。

首をかしげた少女が問う。

「うれしいの？」

「いや、俺は喜んだりしない。」

「じゃあ怒ってるの？」

「いや、俺は怒ったりしない。」

「泣いてるの？」

「いや、俺は悲しんだりしない。」

「楽しいの？」

「いや、俺には楽しむ事なんて出来ない。」

「じゃあ……なんでお空を見るの？」

一瞬の沈黙の後に答えを返す。

「リンにはまだ理解できないさ。」

形だけ繕った笑顔を少女へと向ける。

「むう、パパのイジワル……。」

理解できるはずもない、自分でだって理解できていないのだ。

ほんのりと朱に染まった頬を膨らませて夜の街並みへと視線を移すリン。

そんな表情さえ何となく絵になるのだから未恐ろしい。

先に言っておこう。

俺はロリコンだ。

ただし、それが一般的に言われる【ロリータコンプレックス】という枠に当てはまるかと言われるれば、それはわからない。

言葉にはたくさんの意味があるのだから。

閑話休題。

「ところでリン、相談なんだが。」

「なーに？」

機嫌を損ねたのか、そっぽを向いたままそっけなく答える。

「いまさらだが、パパはやめないか？」

ちなみに俺はまだ一五歳、世間的に言う高校一年生だ。

時代が時代なら元服という形でパパになる事も不可能ではないだろうが、残念ながら今の時代はタバコもお酒も二十歳からだ。

「じゃあお兄ちゃん？」

「パパ以外なら好きに呼んでいい。」
投げやりに答えを返す。

そんなどうでもいい事に頭を抱えてうんうんと悩むリンを傍目に俺は再び空を見上げた。

そして静寂の中に佇む、つい最近まで通っていた中学校舎に、大人の情けない悲鳴があがるのを耳にし、無感情に思う。

本から得られる知識はやはり馬鹿に出来るものではないな、と。

第一幕 第一章 『事起』 (前書き)

このお話はフィクションです。
以下略

第一幕 第一章 『事起』

一ヶ月前、高校入学を目前に控えた俺は、残った春休みを特に何を
するでもなく、ただいつもどおりに過ごしていた。

だがその日はいつもと違い、目覚めた時には早朝にランニングを
行うつももの時間を3時間も過ぎていた。

いつもならランニング後に食べる朝食を起きたばかりで余り食欲
のわからないままに胃に詰め込む。

だがランニングは毎日行うから意味がある、という持論を持つ俺
は、既に朝食を食べ終えてテレビを見ていた両親に軽く声を掛け、
ランニングに出かけた。

「車に気を付けるよ。」

「水分補給は忘れちゃだめよ?」

そんな声を掛けられ家を出た覚えがある。

ほんの三十分程度だっただろうか。

いつものランニングコースを回り家に戻った俺は遠目に、家の前
に停まる一代の黒い年代物の高級車を見かける。

それに乗り込み走り去る一人の神父。

一抹の不安を感じ、自宅玄関の扉前に立つ。

普段よりも重く感じるそれを開くと、家を出た時と変わらずに流
れるテレビの音に杞憂を感じた。

ただいまの声と共にリビングの扉を開いた。

そこは俺の知るリビングではなかった。

まるで演劇の舞台の様な、浮世離れた光景。

ドクンッ

一通り話が済んだ所で、控え目なノックの音と共にスーツを着込んだ中年の男が二人、病室に入ってくる。

怪訝な顔をする祖父母の事など意に介さない様子で俺に事情の説明を求める警官に、ただ早く静かな空間を求める一心で、自らの見た物を淡々と説明する。

職業柄なのか俺の態度が気に入らなかったのかは知らないが、終始胡散臭そうな目でこちらを見つめていた警官は、一応は納得といった様子で病室を出て行った。

祖父母に対しても、少し一人にして欲しいと病室から追い出し、ようやく静寂が訪れる。

そこでやっと、両親の死という非現実的な、だがまごう事無き現実を実感し、胃がねじ切れるかのような痛みに襲われた。

ノドまで込み上げる不快な酸味にさらに気分が悪くなる。起こしていた体を横たえると不快感から体が逃れたがるかのように、急激な睡魔に襲われ、それに抗う気も起らず汚泥の様な眠りに落ちた。

不意に目が覚める。

瞳にはただ真っ白の天井が映り、カーテンの隙間から忍び込む月明かりと街灯に反射して青白く光るそれは、病室の静寂を際立たせていた。

病室で目が覚めてから初めて、落着いて周りを見渡す。どうやら俺は怪我也負っていない身分で個室に寝かされているようだ。

何か他の病人に申し訳ない気もするが、それ以上にこれから先の事に対する不安や、両親を同時に失った悲しみ、そして自分だけが助かってしまったという事に対する罪悪感。

微かに存在する、自分だけは助かった、という安心感。

そんな腐った物が自分の中に確かに芽生えているという事を、否定する事が出来ない自己嫌悪感。

そして恐らく両親を殺したであろうあの神父へのただただ純粋な怒り、いや殺意と言っても差支えはないだろう。

それらの感情が同時に頭をめぐり、心を引き裂く。

胃の腑が抉られる様な痛みを伴う感情の昂りに、治まっていた嘔吐感がぶり返してくる。

殺してやる。

生半可な殺し方じゃない、考え得る限りの苦しみ、痛みをもってだがわかっている。

俺にそんな力は無い。

心が黒い何かに押し潰されそうに、飲み込まれそうになる。

そんな時だった。

……げようか。

それは耳穴を通り、鼓膜を振るわせる様な音ではない。

叶えてあげようか。

響いてくる。

頭の中から直接、声が。

「……誰だ。」

ふふっ、どうだっていいじゃない、そんな些末な事。

ハーブの音に意味を持たせたような美しい声。

私には貴方の願いを叶える力がある。

人を見下した、嘲笑まじりの口調。

そして貴方は願っているし、願いの代償だつて持つてる。

「代償……？」

それは、前触れなく現れた。

「　　そう、代償よ。」

脳に響いていた声が、気づけば耳朵を振るわせる波をもった音となる。

気のせいだと思いたいが、残念な事に耳元に感じる吐息を気のせいだと言い切れる程おれは鈍感には出来ていない。

意を決して、突如現れた存在に目を向ける。

「なっ……。」

そう無意識に呟いてしまう程、それは人間離れた美しさを持っていた。

肩にかかる銀の髪は暗い病室の中で夜の光を浴びて光の粒子を放ち、釣り目がちの瞳は不敵な笑みを浮かべる。

色素の薄い朱色の唇は両端が吊りあがり、それは今にも唇と唇が触れてしまいそうな距離にある。

熱い吐息が肌に触れ、完全に身動きが取れなくなる。

そこで視線はようやく彼女の背中を捉える。

一瞬自分の目を疑ったが、そこには確かに翼がある。

三対、六枚からなる大鷲のような翼。

しかしその色彩は大鷲のそれとは異なっていた。

一方は暗闇の中で逆に際立つ程の、漆黒。

そしてもう一方はその物が光を放っているかのように白く輝く、純白。

頭に浮かぶのは、天使と悪魔の二語。

視線を下げれば前かがみにしなだれかかるような体勢からの必然というべきか、彼女の大振りな双丘が露出の多い薄灰のフリルドレスの胸元から溢れんばかりにその存在を主張している。

もし今も眼前でフワフワと動いている六枚の翼がなければ、どこのコスプレ会場から紛れ込んできたかと思う様な、頭の先から爪先までがゴシツクファツション。

おまけに、熱くもない病室で紅潮し、若干熱を帯びた様子を窺わせる大粒の雫をその胸元に湛えている。

「あらー？お姉さんのこれに興味でもあるのかしら？」
視線に気付かれ、俺は大きく揺れた二つの果実から慌てて目をそらす。

一度目を閉じ、まずは冷静さを手繰り寄せる。

「はあ……ちよつと待て、まずは少し離れる。」
先程から危うい距離と体勢を保ったまま動こうとしない彼女の肩を、半ば無理矢理に押しとどかせる。

肩に触れると、シルクのような肌触りの薄い布越しでも、彼女の体が熱を持っているのがわかってしまう。

そのうえ肩に触れた瞬間、ビクリと体を震わせ、切なくも短い嬌声を零すときた。

悪魔や天使というより、淫魔というイメージがシツクリとくる。

「んもう……強引な子ね……。」
などと口にしながら、されるがままに体をどけるが、その瞳は明らかに此方の反応を見て楽しんでる節があった。

そうはさせるものかと、意地になり無表情と無反応を誇示する。

「せっかくのサービスだったのに、勿体ない事したわね少年。」
そんな事をのたまいながらしぶしぶ二本の足で立つ彼女を見て、少なくとも幽霊ではない様だと安心する。

もしかしたら幽霊であったほうが幾分かましだったかもしれないが。

「さて、単刀直入に聞こう、お前は一体何だ？」

彼女の瞳を真っ直ぐに見詰めながらそう問う。

だが彼女は含み笑いを湛えるだけだ。

なので続ける。

「俺の脳内妄想だとするなら、俺は随分欲求不満らしい。」

ため息混じりの俺の言葉に、

「妄想ねえ……？試してあげよつか？」

そう言いつつ妙に色っぽく体をくねらせると、割とぴったりしたド

レスなのか、やたら二つの果実が強調されるので取り合えず、呆れ

たように目を伏せる。

「妄想かどうかなんて、触れてみないと分からないんじゃない？」

「うるさい淫魔、妄想でないなら夢だ。そうでなければただの変態

だ。」

「あらあら……随分失礼なボーヤね、妄想と夢に大差なんてないでしょう。だいたいこんな絶世の美人の変態なんているかしら翼もあるし。」

さて、頭がおかしいのは俺か、この女か、どちらの方だろうか。

諦め悪く、【夢から覚める】だとか【誘惑に乗る】だとか、ノベル

ゲーム的選択肢が眼前に現れる事を願う。

もちろん選ぶのは前者だ。

だが待つても一向に現れないであろう物にに期待を抱くのはとても生産的とは言い難い。

頭を切り替えて女に向き直る。

「それで、俺に一体何の用だ、変態オブ夢の住人（願望）よ。」

ちなみに（願望）まで口に出している。

人と人とのコミュニケーションに限らず、人と人ならざる者（変態）

のそれにおいても、相対する対象には自分の感情意思を分かりやすく

伝える必要があると俺は常々考えている。

それが100%悪意だとしてもだ。

「人間不信な子ね、あなた友達いないでしょ。」

「その言葉が使えるのは恐らく相手が人間である場合のみだ。友人については余計なお世話だと言わせてもらおう。」

俺の名前は夜永よなが 契ちぎり、孤独を愛する一匹狼だ。

英語でいうならロンリーウルフだ。

涙？これは心の汁だ。いや汗だ。危ない、棒が一本足りないだけで大変な事故を起こすところだった。

「いまの構想事体が重大事故だと思うわ。」

「何を言う、この程度の事象を事故扱いしようものなら年間事故発生件数において某神 県を追い抜いてこの県が常に不名誉の一位を取り続ける事に……ん……？」

警察の憂い顔を想像する前に何かがひっかかった。

「おいお前、俺の名前を言ってみろ。」

「ジ ギ様。」

そのネタは今の世代に通じるのだろうか、微妙なラインだ。

「俺は核で破滅した世紀末を生きた覚えはない。」

「冗談よ、契」

「ふむ……一応聞こう、どうして俺の名前を知っている。」

「んふふっ、病室のプレートに書いてあるじゃない？」

わざとらしい笑顔でそんな事をのたまう。

とんだ女狐だ。

こちらが気付いているであろう事にすらどうせ気付いているのだから。

「書いてない、苗字しか。貴様、人の思考を読み取れるのか。」

「……んふっ、頭の回転が速い子は好きよ？」

そう言っつて、翼を折りたたみベッドの縁に腰掛ける。

自然に此方に向ける事になった背中、翼を出すための大ききく開いた作りになっている。

正直。目のやり場に困るし、いらぬ事にも気付いてしまう。

まさに前門の虎、後門の狼だ、いやまあ少し違うか。

「下着くらいつけたらどうなんだ……。もとい、そろそろ質問に答えろ。お前は何者で、俺に何の用だ。」

表情が見えない為に、こいつが何を考えているかが察しづらい。

そもそも表情が見えた所で内面を悟らせるような易者でもないかもしれない。

だが、感じる雰囲気は先程の様な冗談めかしたものではない。

俺はいつしか気付いていた。

自分が、この胡散臭い美女に、人ならざる者に、期待を抱いている事を。

自らの願いを読み取り現れたこの女が、何かを秘めている事を。

そして彼女はこの先の俺の人生を大きく変える取引を持ちだした。

私と契約をしましょう、契。

第一幕 第二章 『怒』 (前書き)

この物語はフィクションです。
以下略

第一幕 第二章 『怒』

男の叫び声を数えて三つ目、それが自分とリンを追ってきていた人数と一致する。

「リン、そろそろお家に帰る時間だ。」

「えー、リンまだお星様見てたいのに……。」

さっきまで追われていたとは思えない言い草に若干呆れる。

「ふむ……知ってるか？こんな話がある、星も恋も人生も、飽きる一歩手前が丁度いい。腹八分目とも言うがな。」

「リン難しい事よくわかんない……けど、お兄ちゃん言ってるはずかしくならない？」

純粹な顔をして痛い所を付いてくる子だ。

だが残念ながら恥ずかしいと感じる感情など文字通り持ち合わせてはいない。

「でもお兄ちゃんが言うならリンそうするー！」

そういつて軽い腰を上げ、笑顔で此方に向き直るリン。

どうやら星を眺めている内に機嫌は直ったようだ。

それとも元より拗ねた振りをしてみたかっただけなのか。

小走りで足元に向け寄るリンの服に付いた埃を払ってやって、頭を撫でてやる。

すると子猫の様に目を細め、もっともっと言わんばかりに頭を差し出してくる。

「んふふっー、リンお兄ちゃんになでなでされるの大好きっ。」

ふむ、世の大きいお友達を敵に回しそうだ。

「良い子だ。」

とだけ声をかけて、その小さな手を取る。

「でも……さっきの怖い人達は……？」

「心配するな、もう多分動ける状態じゃない、と思う。」

「おおー……！お兄ちゃんかっこいい……！すばいみたい！」

「スパイか……。」
スパイという言葉に感じる違和感は恐らく今日試してみた実験のソース元となったとある文献が原因だろう。
色々と小道具を詰め込んだセカンドバックから一冊の図書を取り出す。

初心者のためのブービートラップ！！
〜これで貴方も良く訓練されたベトコンに〜

千ページを越える分厚いハードカバーに巻かれたオビには、
あのベトナム戦争を生き延びた鬼畜軍曹ウィリアム氏が、ついにその血塗られた禁呪をいた！？
などと、現代の若者向けらしくポップ体を黄色く縁取った文字で売り文句が謳われている。

流石、出版する図書の悪趣味さとその法律すれすれの内容で一時期ネットで話題となった幽閉社が手掛けているだけある。

手が後ろに回らない程度に、これまで通り一部過ぎる需要の為に頑張って頂きたいものだ。

テロの手引き、爆弾の鑄造法を記した事で有名な某図書を禁書としたのに、これを禁書にしない理由がまったく理解できないが、こちらとしては愛読者としての位置に甘んじさせて頂く限りである。

リンの手を引いて既に暗くなった校舎の階段をゆっくりと降りる。
まだ年端もいかないリンの手を引いている事も理由の一つではあるが、それ以上に彼らが応援を呼んでいる可能性も考えられる。

まあガキ二人追うのに応援を呼ぶ、という彼らの自尊心を傷つけるような行為に、はたして及ぶのかどうかは甚だ疑問ではあるが、石橋を叩いて壊し川を泳いで渡るくらいの気構えを持ってウィリアム氏も言っている。

頭の中には良く知った学園校舎内の見取り図、出口までのルート、および待ち伏せが可能であろうポジションが鮮明に浮かんでいる。

各所ポイントでは、リンを少し待たせ、クリアリングを済ませる。校舎四階の上に位置する屋上から、一階まで階段を下り、正面玄関までのルートを思い浮かべる。

途中には職員室があり、職員室には宿直室があったはずだ。

この学校の深夜の警備態勢は基本、教員が一人。

屋上に居て聞こえた断末魔が聞こえていないはずはないが、教員が見回りをしている様子も無ければ警察のサイレンが聞こえてくるわけでもない。

若干嫌な予感がする。

可能性は二つ。

教職というのはハードな仕事だ。

深夜二時ともなれば教員は眠っているだろうし、断末魔で起きるかどうかはどちらとも言えない。

このパターンならいい。

ただもう一つの可能性、先ほどの断末魔の一つが教員の物である場合だ。

つまり一人はまだ行動可能な状態にある場合。

この場合であるなら仲間二人が墜ちた時点で応援を呼ばれていると考えた方が無難だ。

常に最悪の事態を想定して動くならばそう考えて行動するべきだろう。

つまり、ゆっくりはしてられない。

実際に対面しての争いは可能な限りは避けたい。

四階から一階まで下りる過程では今のところ足音を聞いた覚えはない。

恐らくは外か。

この学校は敷地内に表門と裏門の二つ出口が存在する。

それ以外は割と高い塀で囲われており、一人でならともかくリンを連れて出口以外から敷地外へ抜け出すのは難しい。

表門か裏門か。

予測するヒントは残念ながら思いつかない。

「ふむ、リン、表と裏どっちが好きだ？」

リンが急な問いかけにキョトンとした表情を見せるが、此方が多少焦っている事を感じ取ったのだろう、

「表！」

と、恐らくは直感的にだろう、そう答える。

頭の良い子で助かる。

俺は笑顔でこう返した。

「わかった、じゃあ裏門から出よう。」

リンが多少驚いた顔をするが、恐らくは考えがあつての事なのだろうと、察してくれたのか、頷いて再び俺の手を取る。

あの女は、リンが俺を敵の元へ導くと言っていた。

つまりリンが望む方向へ進めば敵と鉢合わせする可能性が高いと言える。

まあ、あくまで可能性。

本当にそのようなロジックがこの限定的状況で働くかどうかはわからない。

敢えて言うならジnkクスみたいなものだ。

そのまま一階廊下を走るのは足音を立てる意味でも避けたかったため、階段を下りて直ぐの教室に入り、窓から校舎の裏側へと出る。すると少し先にはもう街灯に照らされた裏門が見える。

ジnkクスもたまには頼りになるものだ。

裏門には居ない。

リンの手を引いたまま目前の出口へと走る。

裏門から出てしまえばこの辺りは入り組んだ市街地だ、地の利は此方にあるし、何より隠れる場所もいくらかもある。

そう思い、気が緩んだ瞬間だった。

裏門に到達するまであと少しという所で、足元に違和感を感じる。

「ふむ……。」

無感情にそう零す。

夜中では判別の付きにくい細い糸。

そこから遠く結ばれた乾いた数枚の木の札が上手く茂みの中に隠されている。

恐らくは校舎裏のゴミ捨て場に投棄してあった木材を利用したのだろう。

多少ドロに汚れたそれは糸の振動を敏感に感じ取ってカラカラとやけに甲高い音を立てる。

車通りのある昼間ならいざ知らず、夜の住宅街に囲まれた校舎敷地で、音は当然大きく響き渡る。

反射的にリンの手を離してそのまま抱き抱え、全力で残りの裏門までの道を走る。

腕に抱き抱えられ、急な事態に驚いた様子のリンを気遣っている暇はない。

追手が三人共、一度俺達の後を追ってそのまま校舎の中に入る所までは確認している。

これを仕掛けたのは入った時ではない、これは可能性として中に入ってから、外に一人、見張りを出したと考えるべきだろう。

また鳴子を仕掛けるのならば音が鳴ってから獲物が逃げだす前に捕まえる事が出来る位置に見張りがある事を示す。

誤って罠にかけてしまった事が確定した教員に心の中で謝罪する前に、見張りに見つかるより早く裏門から出られる事を祈って全力で走るのだが、どうやらそこまで甘くはなかった。

後門に辿りついた瞬間、ヒュッっという風切り音と共に、石造りであるはずの壁にナイフが刺さる。

それは狙い澄ましたように足を止めた俺の頭部の進行方向に突き刺さっていた。

「お疲れさん。逃避行はそこまでだぜ色男。」

バカンス

ロマオ

多少だが、驚いた。

どんな敵ついオヤジが出てくるか。

そう思っていたが、背後から聞こえてくるのは高く澄んだ女の声だ。ひとまずは抱えていたリンを下ろす。

声の方向へ向き直り、同時にリンを自らの背後に隠す。

「投げたナイフが石壁に突き刺さるような怪力女に色男呼ばわりされるなんてな。良い男なのも考え物だ。まあ生憎売約済みなんだ、俺の事は諦めてくれえ。」

無表情にそう返した俺はちらりと背後のリンを見る。

その表情からはハッキリとした怯えが見てとれた。

そして改めて、正面に立つ女を一瞥し、その意外な外見にまた驚く。若い。

黒いパンツ、黒いタートルネックのセーター、黒いジャケット、黒いニット帽、見えるのは顔立ちと体付きくらいだが、察するに、俺とさほど変わらない歳だ。

顔つきも凛々しく整っており、美人と形容するに何の問題もない。

だが、目つきだけは頂けなかった。

「その目、まるで屍肉をあさるハイエナの……。」

そこまで口にする足元にもう一本ナイフが刺さっていた。

どうやら気は短いタイプのようなのだ。

「口に気を付けた方がいいぜ。せっかくの色男だ、あたしのナイフがまかりまちがってあんたのナニを切り落としちゃったら、この先の人生で抱く予定だった売女が泣くぜ？」

「ふむ、美人は嫌いじゃないが、口汚いのはごめんだな、シモネタは程度が重要だ。」

そう強がってはみるが、若干俺は焦っていた。

投擲の動作が目で追えない。

明りが極端に少ない状況というのもあるだろうが、それにしても早

い。

女のベルトに括りつけられていた三本の投擲用のナイフが二本に減っているのに、足元で音が立つまで気付けなかった。

「まあいい、長話はあんまり好きじゃなくてね。後ろで大事に隠してるジュリエットをこつちに寄こしな。そうしたらあんたの命だけは助けてやる。」

ここまでテンプレ、なんてな。

「口調に似合わず随分とロマンチックな例えを使うんだな、色男ロメオに免じてここは見逃してみるのも、歌劇オペラとしては悪くない展開だと思っただが。」

「はっ、残念だね。あたしはオペラには興味が無いんだ。それがペド野郎の自慰劇オナニーならなおさらね。」

口調がだんだんと強くなっている辺り、大分いらついてきているのだろう。

「気が短い女だな。良い女は男を三年待ってもまだ待ち続けるくらいの堪え性があるものだぞ。」

じりじりと満ち潮のようにせり上がる女の怒りを察してさらに追い打ちをかける。

「けっ……せつかくの二枚目も、舌が三枚あっちゃ台無しだね。いからさっさとそのチビをよこしな、じゃないと自分の切り離されたナニ啜えて夜泣きする事になるよ、ファッキンベイビー。」

そろそろだな。

静かに会話を聞いていたリンを少し見て、軽く両目を瞑る。

それだけで理解してくれたようで、コクリと頷くリン。

「あーあー余裕だな、ペド糞野郎。あたしと話してる最中に御姫様と内緒話かい？」

「これは失礼、うちの御姫様はヤキモチ焼きでな、他の女と喋つてもたまたまに甘い言葉を掛けてやらないとヘソをまげてしまうのだよ。まあその拗ねた姿がまた可愛……」

「そうかい。死にな、ファッキンペド野郎。」

怒気を孕んだ声が一転して凍てつく。

来る、狙いは……頭部。

そう確信し、予備動作を極力短くして首から上を左に逸らす。

その瞬間、目で捉えきれない動作で投擲されたナイフが頬を掠めた。右頬に多少の熱を感じると同時に背中を冷たい物が伝う感覚。

だが確実に一投目は避わした。

「あたしのナイフを避けやがっただと！糞！ファック！」
随分とご立腹のようだが、その動揺を待っていた。

リンに話しかけた際、体を捻り気付かれない様にポケットから出した二つの物。

その片方を、俺は顔を逸らすと同時に投げつけていた。

「ちっ！」

叱咤を漏らす女。

暗闇で飛来する物体が何なのか見分けるのは非常に難しい。

つまり相手はそれを避けざるを得ない。

それが例え、当たってどうなるわけでもない小石だったとしてもだ。そして避けざるを得ないという事はつまり、飛来する物体を視覚に捉えていなければならぬ。

俺は小石を投げると矢継ぎ早にもう一つ、握っていた物体を足元に叩きつけた。

物体は衝撃に反応し、一瞬の強烈な光を発する。

暗闇で少しでも多くの光を得るために開ききった瞳孔を通った強烈な光は、相手が人である以上、その視覚を一定時間奪う。

マグネシウムの粉末を利用し、痲癩玉の原理を応用したウィリアム先生特製の簡易フラッシュグレネードだ。

サイズが非常に小さい為、夜にしか効果がない、効果範囲が狭い、効果時間が短い、等の制約はある。

音響も出ないため本物のそれと違い相手の意識を奪う事も出来ない。

だが一定時間視覚を奪う事さえ出来ればあとは逃げるのみだ。瞑った瞼を開き、リンを抱き抱えて校門から即座に飛び出す。背後では女が罵詈雑言を吐き続けているが、そんな事はおかまいなし、一目散に俺は逃げだした。

「お兄ちゃん、やっぱり、すごい！ほんとに、スパイみたいだった！」
抱き抱えられたリンが興奮した様子で目を輝かせている。

「ああ、スパイかどうかは置いておくがな。あとあまり喋ると舌を噛むぞ。」

走りながらそう答える。

だがリンの興奮は中々冷めない様で、抱き抱えられたまま、俺の首に両手を回してぎゅーっと抱きつく。

「リン、抱きつくのは良いが前が見えない。」

「あつ、ごめんなさい……。あれ？お兄ちゃん、背中濡れてるよ……？」

「ああ、リンを抱えて走ってたらちよつと汗がな。」

「え……。でも……。汗よりなんかぬるぬるして……。鉄臭い……。」
ふむ、どうやら気付かれてしまったようだ。

「嘘……。でしょ……。？お兄ちゃん、これ……。血……。？」

肩に触れたリンの手は俺の血液で真っ赤に染まる。

「ああ、あの女、見えない状態で音だけ頼りに投げたみたいでな、肩に刺さった。」

淡々と、そう答える

リンが触って手を切ってはいけないと思い、走っている最中にわざわざ引っこ抜いたのがまずかったらしい。

傷口がパツクリと開いて止めどなく血液が流れだしている。。

「嘘……。やだっ！おろしてっ！お兄ちゃん！！このまま走ってたら死んじゃう！」

「といってもな、あいつが何処まで追いかけてくるか分からん以上

は足を止めるわけにもいかない。それにこれくらいじゃそうそう死なん。」

そういつつも若干足がふらついてくるのを感じる。

ふむ、このままではリンを落としてしまうかもしれない。

住宅街の小枝の様に分岐する裏道の一つに入った所で一度足を止め、リンを地面にゆっくりと下ろした。

走っていたので全く気付かなかったがリンは今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「どうしたリン、可愛い顔が台無しだぞ。」

余裕ぶつてはいるが、血を流し過ぎたらしい。

足を止めた瞬間、アドレナリンが減少し始め肩の激痛が増す。

足元がおぼつかない。

リンを心配させまいと、わざとらしく一休み、と自ら座る様に見せつつ、崩れ落ちるように冷たい壁に体を任せる。

まずい、目眩がしてきた。

耐えきれなくなったのか、リンが泣き顔で何か叫んでいるようだが、どうにも何を言っているかよくわからん。

朦朧とした中で最後にみた光景は、懐中電灯の光と、誰のものか分からない人影だった。

俺はそれがあの女かもしれないと考えたのだろう、無意識にリンを庇う様に抱きよせ、そこで意識を途切れさせた。

第一幕 第三章 『契約』 (前書き)

この物語は以下略。

第一幕 第三章 『契約』

先程までの浮ついた熱。

自分のみが助かってしまったという喜び。

両親を殺された事に対する、また喜びを感じる自己に対しての怒り。ただ無力な自分に対する哀しみ。

俺の目の前に突然現れたこの女と、話して感じた、久々の楽しいという感覚。

それら先程まで感じていたはずの全ての感情が、まるで元から無かったかのように消えうせ、代替として感じるのはただ、冴え渡る思考と一層深まった夜の静けさだった。

「ふむ……。」

「契約は成立した、でもまだ終わりじゃないわ。あとは貴方が契約を果たすだけ。言うなればこれは前払いね。」

「わかっている。守護を代替として、敵の情報を得る。それで間違いないかったな？」

こくりと頷いた女は先程までより一層怪しげな笑みを浮かべる。

嘲笑っているのだろうか。

こつとも易々と得体の知れない者との契約を飲んでしまう愚かな人間を。

だが俺は悔やまない。

いや、契約後の俺が悔やむ事が出来ないであろう事を予想した上で、契約の前の俺は契約を結んだ。

一切の迷いを失くし、己の目的をただ果たすために。

人は言うだろう。

復讐は何も生まない。

復讐なんて意味がない。

そんなのは真の憎しみを背負った事の無い人間の綺麗事だ。
事実世界には争いが溢れている。

ただ、俺が求める復讐がどのような形になるのかは、契約を結ぶ前の俺も、今の俺でさえも分からない。

俺はただ、目的として作業的にそれを行う。

未だ嘗て誰が行っただろうか。

憎しみの無い。

いやそれどころか、達成した時の喜び、安堵、哀しみ、その全てが存在しない復讐など。

天使や悪魔でなくとも嘲笑って当然なのかもしれない。

冴え渡った頭ですら答えの及ばぬ意味の無い思考を区切り、ただ俺は女に問うた。

それで、その少女というのは、何処に、何時現れるんだ。

それから一週間後、俺はリンと出会った。

気を使い家に住まわせてくれると言っていた話を断り、事故現場となった自宅にそのまま住まう事にした俺を、祖父母は止めなかった。それどころか困った時には相談しろと、毎月の仕送りまで請け負ってくれた。

俺は表面上に繕った笑いで、有難うございます、と一言だけ告げて、

病院を後にした。

もちろん頭にあるのは復讐を遂げる上での障害をいかに減らすか、というただ一点のみだった。

何よりあの女との契約を履行するのに同居人という存在は邪魔なだけだった。

自宅に戻り、再び玄関の前に立つ。

沸き上がる物はもう無い。

何の感慨も無く鍵を捻り、扉を開く。

既に事故現場の形跡は跡形も無くなっており、家の中にはただ静寂のみがある。

数日間、人が存在しないだけで家というのは直ぐに寂れてしまうものだ。

所々に積もった埃を見て掃除の必要性を感じる。

冷蔵庫の中身も、生ものの類はあやうくなっているはずだ。

幸い春休みはあと一週間程残っている。

家を片づけるのにも、また他の色々な準備をするにも時間は十分にある。

そう、目的に対する、色々な準備だ。

家の片づけがあらかた済んだ時には既に夕方五時に差しかかるうとしていた。

ちなみに先程の整理で冷蔵庫はほぼ空っぽ状態である。

「ふむ、今からなら業務用スーパーひぐらしのタイムセールに丁度間に合うか。」

業務用スーパーひぐらしとは、夜永家から徒歩五分というお手軽距離にして、酒を含む飲料、生鮮食品、冷凍食品、調味料、お菓子類、雑貨類、果てはペッドフードまで手広くカバーしている、地域の味方だ。

お値段も主婦の皆様が納得できる物である事請け合いである。

時たま全国最安値！と書かれた商品ポップを見かけるのだが、信用して買ってはいるものの実際最安値を記録しているのかどうかは定かではない。

ひとまず夕飯の食材を買いにひぐらしへ向かう。

家の前を伸びる街路を東へ。

大通りに出たら北へ向かってまっすぐ進めばもうひぐらしだ。

ちなみに大通りを挟んで向かい側にコンビニが見えるが、いかんせんひぐらしに客を持って行かれるのか、余り繁盛はしていない様子だ。

近所の学生は割と利用しているようだが、学生の財布などたかが知れている。

学生による万引きと売上、どちらが上かという所だろうか。

店主も人のよさそうなおっさんで、監視カメラモニターを熱心に見詰めているかと思えば、実際は野球中継を見ていたりする様な人である。

それは万引きも増える事だろう。

ちなみにこの辺りは余り治安が宜しくない。

夜は必ずと言って良いほど酔っ払いの怒号が聞こえて来るし、警官も毎夜見回りをしている。

そんな中で我が家の事件があったのだ、スーパーで奥様方は噂話に必死のようだった。

当然、俺がスーパーに入ると少なからず視線が集まる。

まあ特に何か感じているものがあるわけでもないのに、目的の商品をテキパキと籠に放り込む。

ヒソヒソと周りの声が聞こえる中、誰かが俺の肩をトントンと叩く振り向くと、母親と良く世間話をしていた近所の叔母ちゃんが立っている。

化粧気の無い、人好きのしそうな人で、昔は良く飴などくれたものだ。

「じぶさたしています。」

無表情にそう言い軽く頭を下げる俺に、何か雰囲気が変わった？などと心配そうに声を掛け、御悔みの言葉と、困ったら何時でも相談しろとの内容を告げると複雑な面持ちで清算に向かっていた。

愛想笑いの一つでも返しておいた方がよかっただろうか。

無表情でも当然と言えば当然なのだろうが、過度に心配を掛けるのは度を越した干渉を招き、目的の進行を阻害する可能性もある。

清算を終えた俺は周りの人間に対する対応パターンを考えながら家への帰路に付いた。

しかしふと気付く。

スーパーを出た頃だろうか。

誰かが、自分の後ろを付いてきている事に。

幾つかの可能性を考慮するが、思いつくのはご近所さんよりも例の神父の仲間である可能性だ。

俺が一番気になっていたのは何故俺の両親が殺されたのかという事だ。

警察が口にしていたのは、形跡から物取り目当ての犯行ではないとの事と、実は最近この界隈で通り魔殺人が数件起こっているという事。

だが、その犯行はどれも路上で行われており、押しかけ殺人という形で、それも真昼間からというケースは稀に見る物だったらしい。

もし、何らかの目的を持って両親を狙っていたとするなら、俺を再び狙ってくる可能性もあるという事。

だとすればこれは好機だ。

俺は大通りから小道へ右折する曲がり角で、一度小道に姿を隠す。恐らく相手は俺の家を知っている。

ならば曲がり角を曲がった後も直進してくるはずだ。

顔を確認して、怪しい様なら即行動に移す事も考慮に入れ、先ほど鞆に入れておいた果物ナイフを確認する。

数十秒すると、コツコツとコンクリートを踏む音が段々と近付いてくる。

影は日の光が相手と対面であるため見えない。

小道の電信柱に姿を隠したまま相手が出て来るのを息をひそめて待つ。

しかし、最初に見えたのはヒラヒラと揺れる白いワンピースの裾だった。

そして予想していた高さよりかなり下に、恐ろしく整った顔立ちが現れた。

「女の子…?」

ふと頭に過ったのは女と交わした契約だ。

これから近いうちに、お前の前に少女が現れる。それはもう間違えようのない程に美しい銀髪の少女だ。お前にはそれをただ護ってもらおう。

歳は十歳前後といった所だろうか。

外見は……確かに、見紛う事がないレベルだ。

それに銀髪の女の子なんてそうそう居るものじゃない。

少なくとも俺は初めて見た。

日本人の顔に銀髪なんて似合うはずもない。

だが多少ハーフを思わせる様な凛とした顔づくりに、作り物とは違う一本一本が絹糸の様な光沢を持つ髪はこれ以上も無く映えていた。俺が潜む小道の前を通り過ぎた女の子は小鳥の様に忙しなく辺りを見渡しながらその先、自宅に向かっていく。

それにしても、この辺りの治安の悪さを鑑みるに、こんな小さな女の子に独り歩きをさせるとは、あの女いったいどういっつもりだ。

小道から出た俺は、通り過ぎた少女の後を追う、が同時に違和感に

も気付いた。

普段ならこの時間帯、この通りは夕飯の買い物に出る人々である程度人通りがあるはずなのだが、少なすぎる。

ふと目に入った通路の突き当たりに止められた、見慣れない黒塗りの高級車。

視線を戻せば少女は何かのメモと家の表札を何度も見比べている。

間違いはない、だが余裕もないな。

早歩きで少女に近づいた俺は、

「取り合えず話は中でしょう。」

そう囁き掛けて女の子の手を優しく取り自宅の鍵を開け中に入れるいきなりで驚きを隠せないままに手を取られた女の子は俺の不出来な笑顔を見てどう思ったのか、ひとまず黙って頷き、成されるがままに我が家の敷居をまたいだ。

自宅に入った俺はひとまずチェーンロックを含めた全ての鍵を掛ける。

そして一度しゃがみ込み女の子と視線の高さを合わせる。

前何処かで読んだ子供に対する対処法だ。

正直半信半疑だが、やらないよりましといった所だろう。

「名前は？」

「ふえっ？えと……えと……。」

どうやら余り効果が無かったのか、それとも俺の無表情が怖いのか、帰って来るのは戸惑いのみだ。

「ふむ……。」

行き成り名前を聞くのは不躰だっただろうか。

何より子供の扱い等、本で読んだ中途半端な知識があるのみで、あとはてんで素人である。

しかも状況が状況。

もしこの少女があの子の言う少女でなければ、あつというまに警察のお世話になってもおかしくない。

改めて少女を見る。

十前後の子供にしては整い過ぎた顔立ち。

腰元まで伸びる美しい銀髪は揺れる度に鈴と鳴る様な錯覚を抱かせ
る。

しかし今その表情は硬く、怒られた後の子犬の様で、視線は落着か
ず低空飛行、おまけに両手は腰の前で組まれている。

その動作、仕草から受ける印象は、不安。

俺にそういった感情事体を理解する事は出来ないが、子供が不安を
抱きやすいというのは理解できる。

そういえば、と先程の買い物した袋の中身をガサガサと漁る。

「あつた、いるか？」

そういつて取り出したの是一本のスティックキャンディーだ。

ゆっくりと、少女の前にそれを差し出す。

「……うん。」

そう返事し、おずおずと飴に手を伸ばす女の子。

俺は女の子の頭の上にポンと手を置いて、ゆっくりと撫でる。

「取り合えず今は何も聴かん。お前がしたいようにしろ。だから、
話したくなったら色々と事情を話してくれるか？」

「……うん。」

先程とは違い、ある程度直ぐに帰って来た返事。

表情もいくばくか和んだ様だ。

頭を撫でられて擦ったそうに目を細める女の子を見て、俺は無言で
頷いて腰を上げ、リビングへ向かう。

「何時までも玄関に居るわけにもいかん、こっちでゆっくりしない
か？」

背後に向かって声を掛けると、トテトテという足音が聞こえる。

そして今更に気付く。

少女の頭を撫でている時、自己の意識とは関係なく、余りも
自然な、『作り笑い』を浮かべていた事に。

「リン。」

彼女がそう呟いたのは俺が夕食を作り終わってニユースを眺めながらお茶をすすっていた時だった。

「名前か？」

「うんっ。」

先程のステイックキャンディーを啜えながら、なんとも言い難い表情でニユース番組を眺めるリンと名乗った女の子。

「良い名前だな。」

そう答えるとリンは初めて俺に、その鈴の音色のような笑顔を見せた。

ああ、確かにこの笑顔は名前にぴったりだな、と思う。

苗字は何なのか、何処から来たのか、親はどうしたのか。

聴きたい事は山程あったが、それはひとまず飲み下し、俺はリンを夕食へと誘った。

それが計ったようにリンのお腹が小さく鳴るのと同時に、少女はにかむような笑顔を浮かべた。

さて、今日の夕食のメニューはまさか女の子を拾うとは思っていなかったために割と質素なメニューとなっている。

といつても、炊き立ての白御飯、湯気を立てる合わせ味噌の味噌汁。ここに塩鮭の焼き物とキュウリの漬物。

これだけあれば日本人は生きていけると言っても過言では無いと思う。

ふむ、朝食のようなメニューになってしまった。

そんなありふれたメニューを眺めるリンの目はまるで初めて見る食べ物の前にしたが如く、輝いていて、うあーと開ききった口からは若干涎が垂れかかっている。

「おい、涎。」

「っへ！？うわわっ！」

無意識だったのか慌てるリンの口元を暖かい布巾で拭いてやる。するとリンがじーっと此方を見つめて来る。

お預けを喰らった犬の様な顔をしている。

「なんだ？」

「……食べていいの？」

「俺が一人で食うには皿が多いと思わないか？」

「わかんない、もしかしたら両手を使って食べる人なのかもしれない……！」

「残念ながら両手で箸を使っても口が一つしか無いからな。」

「そっかなるほど……！じゃあ、頂きますっ！！」

そういえば若干ハーフの様に見えるが、箸は使えるのだろうか、少し気になって見つめてみる。

「んむんむ、じゆるじゆる、ポリポリ。」

見事な箸捌きだった。

「箸、使えるんだな。使い方も綺麗だ。」

「んむつ？……ごつくん。」

「ああ、別に急いで答えていい、良く噛んで食え。」

「もう飲んじやった。よくわかんない、けど使えたっ。」

「ん？親から教えてもらったのかと思っただが違ったのか。」

「うん、パパもママも誰かわかんない。」

まずい事を聴いたのだろうか。

丁度いいから今聴いてみるか。

「いないのか？」

「うーん、わかんない。覚えてないの。」

あまり考え込んだ様子も無く答えるリン。

「覚えてない？どこから来たのかとか、そういう事もか？」

「うんつ。リン気付いたら人がいっぱい居るお店の前に立ってたの。覚えてるのはメモのお家に行くって事くらい？」

そう言えば、リンは出会った時あのメモ一枚しか持っていなかった。ふむ、よくわからんが、まあいいか。」

そう言っただけ俺も自分の分の食事に箸を付ける。

うむ、今日の味噌汁は良くできている。

味噌汁はやはりおあげとネギと豆腐の味噌汁に限る。

そんな俺の顔を不思議そうに見るリン。

「……いいの？」

「何がだ？」

「ふつうのひとは誰か知らない人をお家にあげたりしないんでしょ？」

「まあ普通の人はな。」

「それにリン、名前もまだ聴いてない。」

「俺の名前は夜永 契だ。」

「ちぎり……？」

「ああ、ちぎりお兄ちゃんとも呼んでくれ。」

「うーん……。」

考え込む事の多い子だ。

俺は気にせずに鮭の切り身と御飯を口に運ぶ。

塩鮭と白御飯の相性はどうしてこんなにも素晴らしいのだろうか。

「ちぎりお兄ちゃん、パパ……？みたい。」

「覚えてないんじゃないのか？」

「うーん……、でも何だかそんな感じがしたの。」

「ふむ……」

「パパって……呼んでもいい？」

上目遣いでそう問われる。

パパか、何か色々問題があると思うのだが、取り合えず今は呼びたい様に呼ばせておくか。

「まあ、取り合えずはそれでもかまわん。」

それにきつとどこかで、父親を求める子供心というのがあるのだろう。

とりあえず自分をそう納得させるのだった。

さしあたっての問題が、呼び名なんて物では無かったことに、俺は食器の片付けを終えた辺りで気付いた。

「リン、風呂沸いてるから入ってこい。」
「わかったー。」

ととととお風呂場に向かっていくリン。
生活に必要な個所については既にリンには教えてある。
だが誤算だった。

「パパ……入らないの？」

リビングの扉から少しだけ顔を出してそう聴くリン。
まず頭を過つたのは赤い回転灯を付け大きな音を鳴らす白黒の車だ。
だが傍目から見て、見ず知らずの女の子を自宅に連れ込んでいる時
点でそのラインは通り過ぎていくだろ。

それに見るからにリンはまだ子供だ。

「一人で入れないのか？」

一応、最後の抵抗として尋ねる。

「多分……入れるけど……怖い……。」

まあ、世の中には中学生になって一つ違いの兄妹で一緒にお風呂に
入っているような奴もいる。

それほど大きな問題じゃないか。

結局はそう甘んじる事にした。

「しょうがないか。ただ、基本は一人で入れるように慣れるんだぞ。」

そう答えると、リンは花の咲くような笑顔でお風呂場へと走って行
った。

そう、女の子と一つ屋根の下で暮らすのだ。

こういう事がこれからも多々あるかもしれないという事を余り考え
ていなかった。

まあ、当然の事ながら、未成熟で無邪気なリンの体に対して俺が何
か邪な感情を抱く事は無かった。

正直言つて、リンは可愛い。

もしも反応してしまつたらストレートに生理現象だと説明して良い
物なのか、多少だが真剣に悩んだのは杞憂に終わったというわけだ。

風呂からあがり、ソファでリンの髪の毛を乾かしてやる。

こうしていると一五歳にして本当に一児の親になってしまった様な気になって来る。

周りから大人びていると言われた事はあるが、それは物心ついた時からの割と無感動な性格と歳の割にはずんずんと伸びてしまった身長のせいだろう。

自分でも同い年と比べれば割と達観した方ではあると思っては居るが、それでもまだ人生の経験不足を補う事が出来ないのは口に出して言うまでも無い。

「パパっ、髪乾かすの下手っ！」

「む、すまん。」

こういうのはドライヤーを少し離して当てながら髪を適当にがしごとやれば乾くとだけ考えていた俺に、その言葉は嫌に深く突き刺さった。

何だろう、この敗北感。

男としての何かを大きく抉られた様な気がする。

「不慣れなんだ、どうすればいいか教えてくれるか？」

「うんとね、もうちよっとだけ優しくして？」

そう上目遣いで言われ気付く。

この子はまだ世に出しては危険だ。

色々な意味で。

天然というか、穢れを知らなさすぎるというか。

この歳にしてこうも誘っているような、女の香りを匂わせる仕草を身につけているとは、何とも未恐ろしい。

俺が色々と欠落してしまった人間でなければ多少危なかったかもしれない。

ときに、季節はもう春とはいえ、気候はまだ若干の冬を残している。余り薄着では風邪をひいてしまっし、残念ながら女の子用の寝間着など用意できなかったため、何故か俺のクローゼットの奥深くに合

った鳥類を模したきぐるみのようなパジャマをリンには着せている。のだが、どうにもそのチョイスがリンの破壊力を増幅している節があった。

「こうか？」

先程までと違い、手櫛で髪を軽く梳くようにして流しながらドライヤーの風を当てる。

どうやらそれでお気に召したらしく、頭を撫でられた時の様に目を細めて大人しくするリン。

髪を梳くたびにシャンプーの香に混じって不思議な香りが鼻腔を撫でる。

金木犀の様な、干したての布団の様な、何とも形容しがたい香りだが、間違いないのはその香りで多少心安らぐ自分が居る事だろうか。同時にこの感情は危ない物では無いのだと、自らに機械的に言い聞かせ、髪を乾かし終える。

「リン、大体終わったぞ。」

「……ふみゆう……。」

「リン……？」

気付けばリンは人の葛藤など知る由もなく。座った姿勢のまま眠ってしまった。

天使の様な寝顔、というには少々涎が垂れて来ている。

ティッシュで軽く口元を拭いてやり、二階の自分の部屋のベッドまで起こさないよう慎重に運ぶ。

流石に亡くなった両親の部屋に寝かせるのは気が引けたのだ。

そして俺は自分の部屋の床に布団を敷いた。

寝る前に家中の電気とガスのチェック、そして戸締りの確認を忘れない。

最後になった自分の部屋の電気を消し、自らも床に就く。

だがその前に、リンの寝顔をチラリと除く。

これから一緒に生活する以上、恐らくは面倒な事が多々続く事だろう。

それはきつと俺が普通の人間なのであれば、例えようのない楽しい日々になったのだろう。

今日は中々、永い一日だった。

明日の事は、明日にならなければ分からない。

楽天的、というよりは無感情な思考放棄というべきだろうか。

目的を忘れてはならない。

そう、あくまで、俺はこの小さな女の子を、護るべくして家に招いたのだという事を。

この半日の平温なんて序章に過ぎないのだという事を。

第一幕 第四章 『回想』 (前書き)

この以下略。

第一幕 第四章 『回想』

「パパ……暖ったかい……。」

あ、ありのまま今起こったことを話そう。

朝起きたら、俺の隣に幼女が寝ていた。

な、何を言っているのか分からないと思うが、俺も何を言っているか良く分からない。

頭がどうにかなりそうだった。

JKとかJCとかそんなチャチなもんじゃ断じてない、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

つまり何が言いたいのかと言うと、俺は頭が悪い。

違う、間違えた。

もとい、俺は寝起きが悪い。

というよりは、目覚めた瞬間の判断力が著しく低下する傾向があるのだ。

つまり、昨日の夕方例え自ら少女を家に連れ込んでいたとしても、そのまま一緒に夕食をとっていたとしても、そのまま風呂と一緒に入ったりしていたとしても、その内容を朝目覚めたこの一瞬だけは完全に忘却していてもあろうことか若干動揺してしまったという事だ。

ああ、思い返してみれば、俺はもう桜田門のお世話になっても文句が言えない立場に居るのだ。

何せ寝ぼけ眼でむにむに言っている目の前の生物は俺が例え色々欠落している人間だとしても危険だと判断できるレベルの愛くるしさを内包している。

世の大きいお友達、もとい童貞諸君ならば朝立ちしたイチモツをそのまま沈めに掛かろうと考えてもそれはそれで致し方ない事なのかもしれないと思えてしまう程だ。

ああ、俺はいつたい何を言っているのだろう。
とりあえず落着こう。

まだまどろみから抜けきれない俺は、いつの間にかベッドから降りて布団に潜り込んでいたリンを起こさない様に、静かに立ち上がると、洗面所に向かい顔を洗った。

時計を見ると時刻はまだ朝五時半。

今日の予定を考えれば若干早過ぎる時間だと言える。

まずは昨日寝る前に洗濯機に放り込んでいた洗濯物を気だるい頭で覗き見る。

衣類の中には普段見慣れない縞々の三角形の布つきれだとか、純白のワンピースだとかが入っていたが、そんな事は気にするべき事項ではない。

思考を置き去りに習慣で身に付けた反射によって衣類をそのまま乾燥に放り込んでいく。

亡き母が悩みぬいて購入したこの乾燥機は、大容量の衣類を労わりつつも太陽の元で干すのと変わらないような仕上がりにしてくれると評判の逸品である。

と言っても、昨日帰宅してからの洗濯物なので二人分＋、大した量ではない。

放りこみ終わったらスイッチを押してあとはコトコト三十分待つだけである。

俺は一先ず自分の部屋に戻り、クローゼットから黒のトレーニングウェアの上下を取り出す。

ちらりとリンの様子を見るが、まだぐっすりで起きる様子はない。ここで着替えても問題ないか。

ささっとトレーニングウェアに着替えて俺は家を出る。

軽くアップを済ませ、いつも通りの決まった道筋を、いつも通りの一定のペースで走る。

入院している間ご無沙汰だったので、いつものペースを維持するの

が若干辛く感じるが、少し無理をしても元の調子に戻しておかなければならない。

リンが来た以上、あの女の言うとおりならばこれから色々面倒事が起こるはずだからだ。

三月の朝、冷えた空気が頬を切る感覚が熱くなってきた体には心地がいい。

三十分程掛けていつもの決まったコースを回り、家が近くなってくるとやはりあの光景を思い出してしまう。

だが、思い出すだけで特に込み上げる感情など無い。

それは、自らが選択した現在であり、捨て去った過去であるとも言える。

目的を果たす、ただその一点に己を集約するために。

自宅に戻ると時刻は六時を過ぎていた。

リンはまだ眠っている様で、足音は聞えない。

一先ずシャワーを浴びて汗を流し着替えを終える。

既に停まっていた乾燥機の中身を取り出して、折りたたんだら次は朝食の準備だ。

こうして居るとリンが俺をパパと呼ぶのも何となく頷ける気がしてしまう。

実際の所、父と母は仕事で家を空ける事が多かったので家事全般は自分でこなす事が多く、手順は慣れたものだ。

今日の朝食は昨晚の味噌汁、ベーコンエッグと付け合わせにレタス、白い御飯も勿論欠かせない。

味噌汁を温めると、いつも通りの朝の香が部屋に立ち込める。

時刻は七時を少し回った頃だろうか。

「そろそろ起こすか。」

「誰を起こすの？リンが起こしてこようか？」

「いやなそろそろリンを……」

「リンー？私？」

あれ。

「お前いつからそこにいたんだ。」

気が付いたらリンは食卓についていた。

「さっきからー！」

「さっきがいつかはわからんがまあいいか、朝飯にするぞ。」

「うんっ！」

ふむ、色々と調べる事がある見たいだな、気配の察し方なんて文献があるかどうかは知らんが、探してみる価値はあるかもしれない。他にも色々と目処を付けている文献がある。

これから色々と荒事の渦中に立つかもしれないのだ、準備をし過ぎて困る事は無い。

今日もまた、永い一日になる事だろう。

「はっはっ、はっはっ。」

「ううううっっ、うーっ！」

まあ予想通りというべきか、その日の内にこうして黒服の変態が編隊を組んで襲ってきているわけだが。

どう変態か、と問われれば、俺はともかくあいつらの目的は恐らくリンだ。

幼女を大人三人がかりで追いかけてまわすなんて変態の所業としか思えない。

時刻にして深夜零時。

鬼ごっこのスタート地点は我が家の玄関だ。

今日一日、まずリンの服を調達後、図書館で色々調べ物、その後専門店でちょっとした仕掛けの調達を済ませた。

その後自宅に戻って夕食を食べ若干の作業をしたまではよかったのだが、夜の散歩がてらコンビニまでデザートを買に行こうと出かけたのがまずかった。

やはり子供は夜九時には眠りに就かせるべきだったのかもしれない。家から出た所に丁度我が家を見張っていたらしい黒服三人と遭遇。始まったのがこの鬼ごっこというわけだ。

正直、リンを連れての追いかけっこは分が悪い。

今の所は地の理を生かした攪乱目的の道をたどる事である程度距離は離れているが、このままではいずれは追いつかれるだろう。

「うええー……、リン疲れたよう……。」

リンもこの様子だ。

どうしようかと思惑に耽る俺の目に入ったのは見慣れた校舎だった。ふむ、丁度いいか。

「お姫様、ちよつと失礼しますよ。」

俺は返事を待つ事無くリンの体を抱き抱え、そのまま校門を飛び越える。

後ろでは黒服三人の追ってくる足音が未だに聞こえている。

どうやらこのまま校舎に隠れてお終いというわけにもいかなさそうだ。

丁度試してみたかった事もいくつかあったので彼らには実験台モルモットになつてもらおう事にしよう。

問題はまずどう仕掛けの時間を稼ぐか。

こうして今夜この校舎は、俺の実験場へと姿を変えたのだった。

「クソッ、クソッ、クソッ！」

あのペド糞野郎、生意気だ。

そう感じたのは奴らを追いかけて始めて三分もしない頃だった。
こちらは三人。

相手はチビ餓鬼を含めた二人。
追いつけないはずがないのだ。

だが、道々で此方の先を読む様なルートを各種フエイントを入れて
選択してくるためになかなか追いつく事が出来ない。

それどころか距離を離されている節がある。

確かにここに派遣されてまだ数日、地の利は間違いなくあちらにあ
るとはいえ、こつも手玉に取られているようだと、だめなのだ。

抑え切れない、怒りを。

アタシには、怒り以外の感情が存在しない。

それは、『とある悪魔』との契約で、驚異的な身体能力を得た代償
に怒り以外の感情を支払ったからだ。

だがアタシは後悔していない。

それどころか、むしろ力を手に入れた上で余計な感情を取り去って
もらえた、アタシにとっての一石二鳥の取引だったと思っている。

何より、この力は素晴らしいものだ。

もう身寄りが居ないアタシがこの組織で、『悪魔の枝』（ミストル
テイン）でやっていけるのもこの力があるからこそだ。

そう、アタシがここに居る為にも、アタシがアタシであるためにも、
さっさとあの糞肉たらしい餓鬼をとっ捕まえなければならぬのだ。

「おいエンジェル、ぼさつとするな、標的が学校に逃げ込んだぞ。」
仲間の一人、禿頭の男、ジニーが思案にふけていたアタシに声を

掛ける。

アタシは人に指図されるのが大嫌いだ。

「てめえに言われなくてもわかってんだよ禿つ！次アタシの事エン
ジェルなんて呼びやがったらケツの穴にアタシのナイフぶち込んで
やるからな！」

アタシはアンジエ。

アンジエはこの組織に拾った野郎が勝手に付けたコードネームだ。

怒り（アングリー）をもじったこの名前をアタシは気に言っている。だが皮肉を込めて、仲間はアタシをエンジェルと呼ぶ。本当に、考えたついた野郎をぶっ殺してやりたいくらいに気の効いた皮肉だ。

だが今はそんな事よりも、目の前の獲物を狩って、怒りを鎮めたい。随分とコケにしてくれた代償は高い物になりそうだ。殺さない様、自分を抑えなければならぬ。

標的に一歩遅れて校門から侵入する。

まず前衛、短髪の男、トロイが侵入後、役割として安全を確保する。次にジニーが侵入し敵を威嚇、そこをアタシがしとめる。

それがアタシらの基本陣形だ。

だがまずトロイが侵入する時点で声を上げた。

「なんだこれは……。」

校門を越えた先に広がっていたのは、一言で言うなら煙だった。

視界いっぱい広がる煙。

夜間、街灯に照らされた白煙で校舎入口への視界はほぼゼロの状況だ。

所々でオレンジ色の光が垣間見える所を見ると、恐らく発煙筒を使ったのだろう。

「油断するなっ、逃げる時に見せていたあの動き、あのガキは普通じゃないぞ。」

リーダーであるジニーが警戒を促す。

「ウィルクッ。」

トロイとアタシは義務的に返事をする。

ちなみにウィルクとは *willie comply* の略で、命令に従う、という意味を表す。

考えなしに煙の中を進むのは危険だが、おちおち逃がすわけにもいかない。

三人で三方向を警戒しつつ、校舎に侵入すると煙も流石に届いてい

ない様子だ。

だが奴らの姿はない。

大方予想通りというべきか、発煙筒はただの目くらましだった様だ。

「トロイは俺と中、アンジエは外で警戒。いいな？」

「ウイルクツ。」

「ざっけんな！アタシが中だ！」

「落着けエンジェル、今のお前じゃ標的を殺しちまいそつだ。少し外で頭冷やしてろ！」

「この糞禿、またその名前で呼びやがったなっ！糞っ、外に出てきたら覚えてろ！」

「ウイルク。」

片目を瞑って軽くウインクして去っていくジニーの後ろ姿を見てナイフを投げつけたい衝動を抑える。

あの糞禿、気持ち悪いウインクなんぞ残していきやがって。

もちろん、外で待つと言っても休んでいて良いわけではないのは分かっている。

その時自分が出来る最高の仕事をしろ。

それがジニーの口癖だ。

アタシはアタシの出来る事をしよう。

そしてこの後、校舎からジニー、トロイ、そして知らない男の悲鳴が聞こえ、アタシは人生で二度目の敗北を味わう事になるのだった。

第一幕 第五章 『回帰』

俺はただ闇を見据えている。

ただ何も無い、虚無の暗黒だけが広がっている光景。

夢、希望、期待、理想、全ての望みはここには存在しない。

俺はそれでもただ虚無の空間を見据え続ける。

いつか誰かが言っていた。

真つ直ぐ前を向け、そして目を逸らすな。

目を逸らして見えて来る物は本当に己が望む物ではない。

「そんな事は言われなくても分かっている。」

絶望の間の中、俺はただ闇を睨みつける。

自らの力で、何かを見いだせる其の日まで。

手が掴まれる。

ふと意識を取り戻した俺は見覚えの無い光景にまた寝ぼけているのかと考える。

だがそれはいつものまどろみではない。

なぜならはつきりとわかるからだ。

小さな手が、俺の手を力強く握りしめているのが。

「リンか。」

傍らに目をやれば、銀髪の少女が俺の手を握ったまま眠りこけて

いた。

上半身裸でベッドに寝かされた俺の背中にはいつのまにやら包帯が巻かれ、痛みが引いている。

部屋を見渡す。

清潔感のあると言えは聞こえはいいが、言ってしまうえば空虚な部屋が広がっている。

全体的に物が少ないのだ。

一台の机には本立てがあり、そこに数冊の本、あとはベッドがあるだけ。

その本も教科書類だけのようだ。

淡いグリーンのカートンがかかる窓を見ると外はもう明るくなっていた。

日の具合から推測するに、もう昼間になろうという所か。

立ち上がろうと思うが、手を握ったまま離さないリンを引き摺る事になってしまうと考えるとそれも躊躇われる。

手を離そうか否か考えている内に部屋の扉が開いた。

「あらあら、目が覚めたんですね。」

そう言っ姿を見せたのは一人の女性、いや女の子か。

歳の頃は俺と同じか少し上といった所だろう。

大人びた落着きのある雰囲気、理知的な瞳がブルーフレームのアンダーリムグラス越しに優しげな視線を送る。

途中まで三つ編みで一本にまとめられた長い黒髪は左肩から前へ柳の様に流れている。

暖かな色合いのカーディガンを押し上げるのは眼を見張る飽満な胸。

その割に細い腰はさらにその果実の重みを強調している。

外見だけ見るならば一番適した例えは聖女だろうか。

「どうにも世話になったみたいだな。礼を言おう。」

「どう致しまして、私はただその女の子のお願いに答えたに過ぎませんが。それに私如きが他の方のお役に立てたという、それだけ

で私は幸せですから。」

そう微笑みながら言う彼女の顔には欠片の含みも見られない。

本心で言っているとしたら希少を通りこして絶滅危惧種レベルの善人だ。

「それに、感謝するなら私よりもその子にしてあげてください。

私が処置した後も朝方まで起きていて貴方の手を握り続けていたんですよ？本当に優しい子だと思います。」

そういつて彼女は俺の隣でむにやむにやと眠るリンの頭を優しく撫でた。

「んみゆう……パパ……もつと……。」

そう寝言で呟くリンに、あらあらと微笑む聖女はパパという発言には触れてこなかった。

説明すると面倒な事になるので非常に助かる気遣いだ。

「差支えが無ければ名前を教えて貰えないか？」

「私ですか？私は希理子、渚 希理子と申します。覚えて頂けるなら幸いです。」

多少の恐縮を含めた笑顔で希理子は答えた。

「希理子、か。恩人の名前だしな、せっかくだし覚えておこう。」

「ふふつ、恩人だなんて……嬉しい。それならお礼に、というのも変ですが、貴方とこの子のお名前を教えて頂けませんか？」

「ああ、俺は夜長 契。この子の名前はリンだ。聴かなかったのか？」

「ええ、治療に必死でしたから、つい聴くのを忘れてしまいました。リンちゃんも、契さんをずっと心配していて聴ける雰囲気ではありませんでしたし……。リンちゃんは契さんの事を本当に大事に想っていらっしやるみたいですね。」

俺は微笑ましくリンの寝顔を見つめる希理子に釣られてリンの寝

顔を見る。

こんな傍で話をしても起きる気配は一向にない。

「ふむ、実は俺もリンと会ってまだ間もないんだがな。」

「ふふふつ、それはきつと契さんに不思議な魅力があるからですね。」

「魅力？俺にか？」

人として必然である物すら足りていない俺に対する評価としては斜め上を狙った物だと思う。

「契さん、自分にはそんな物ない、なんてお考えですね？」

「ん？口に出していたか？」

「いいえ、でもお顔を見ていれば何となくわかりますよ。」

そう嬉しそうに笑う希理子を俺は見つめた。

慈しみに満ちたその目を見ていて俺は漠然とした違和感を覚えた。何だろう。

恐らく俺とは似ても似つかぬ種類の人間であるはず。

だが何故か似た匂いがある。

俺と同じ、何かが欠けているような。

ハッキリとした理由も無い感覚。

この感覚は何処かを感じた事があつた気がする。

何処かは思い出せないが、ごく最近の事だ。

「さて、朝ご飯、というには大分遅いですが、簡単な食事を用意してあります。良かったら召しあがってください。」

希理子の申し出に思索を打ち切られた俺は、いつも通りの思考放棄で頭を切り替えるのだった。

希理子が部屋に食事が運んで来ると、予想通りその香りにリンは眼を覚ました。

「いいにおいする……お味噌汁のにおいっ。」

「あら、お姫様のお目覚めみたいですね。」

「お姫様というよりはこの目覚め方だと冬眠明けの熊だろう。」
「そんな酷いつ、うふふつ。」

自分の事を言われているのだと気付かないリンは、我関せずと言った様子でお盆の上の焼き魚に眼を奪われていた。

「リンちゃんの方は下に用意してありますから。」

という希理子の言葉に明らかに不満を浮かべるリン。

「このお腹は減っているが俺から離れたくないらしい。」

「リン、お兄ちゃんと食べたい……。」

「そうか、じゃあ俺のを分けてやるつ。」

効率的に考えその結論に至ったのだが、リンは首を勢いよく横に振った。

「お兄ちゃんは怪我してるんだからちゃんと食べないとだめなの！」

と、片意地を張るリンに、

「あらあらうふふ。」

と、また笑みを浮かべる希理子。

最終的には俺が十分に歩ける状態だったため三人で一階に下りて食事する形となった。

食事中は食べるのに必死なリンを置き去りにして俺は希理子と会話をする。

「見事な和室だな。」

「有難うございます。といっても祖父の趣味と言いますが、家事体も相当古くからある物なので、そのための必然と言いますか……、でも私も自分の部屋よりこのお部屋の方が気に入っています。」

部屋全体をいとおしむ様に眺めてそう答える希理子。

二階にあつた希理子の部屋は如何にも現代建築といった風の部屋だったのが、一階に下りてみればそこは古き良き日本建築、といった情緒溢れる畳敷きの造りになっていた。

今食事を取っているのも畳に座布団と卓袱台を並べた和室で、手

入れの良く行き届いた障子と壁に囲まれた落着きある雰囲気の部屋である。

障子を開ければ今では余り目にしなくなった縁側から、丸石に生えた苔も風情を醸し出す日本庭園が広がっている。

こちらもよく手入れされていて、猪鬃しが石を打つ音が時たま響くのが何とも言えない情感を醸し出している。

「二階は増設したのか？それに立派な家で手入れが良く行き届いている割には余り人の姿を見かけないな。」

「二階は母の趣味と言いますか、和より洋を好む方だったので、お言葉の通り増設された物です。人が居ないのはここが離れたからです。庭園を少し歩くと本宅があります。そこに祖父母が居を構えていらつしゃいます。」

母についてのくだりが過去形だったのが多少気になるが、本人の表情には微かな変化も見られない、さして口を挟む事でもないだろう。

「これで離れか、随分とお嬢様に拾われてしまったみたいだな。」

「そんな、ただの田舎娘ですよ？」

笑いながら口元を押さえる仕草も上品だ。

礼儀作法もしっかりと仕込まれているのだろう。

だがそんな事より気になる事が一つあった。

「所で、失礼な事を承知で聴かせてもらうが、その胸は本物なのか？もはや違和感を感じるレベルのサイズなんだが。」

至極真面目な顔をして問う俺の発言に、空気が一瞬凍りついた。

リンは行き成りの上にあんまりな話題転換で口に含んだ御飯を拭きそうになって必死に口を押さえて我慢している。

俺は心ばかりの気遣いにリンの前にスツットお茶を差し出した。

そして希理子の口では無く、目を見る。

多少驚いた様子は見られるが、不機嫌さは見られない。

そして帰って来た発言に一瞬耳を疑った。

「えーと……、触って、みますか……？」

咄嗟に頭を過つたのは翼が六つ生えた変態の姿だった。

事実は小説より奇なり。

というのも、あの女が現れてからは的を得た慣用句だと思えるようになった。

当然、純粋な好奇心が俺の手を動かしたのは言うまでも無い。

「それでは、据え膳食わぬはなんとやらと言っし、遠慮なく。」

いつでも来い、と堅く目を閉じる希理子。

俺は、手を伸ばした。

と同時に、音を聞いた。

その音は鈍く、至極詳細に述べるのならば木製の箸が味噌汁のお椀を貫く音だった。

物理法則を疑いたくなる様な所業を成し遂げたのは我が義妹で有る処のリンだった。

「お兄ちゃん　冗談で聴いたんだよね？そっくだよね？」

なるほど、口は笑っているが目は笑って居ないという表現はこういう時に使えば良いのか。

天国と地獄、いや意味合いを考えるなら両方とも地獄か。

ただその目を向けられて手を止めてしまう程には迫力のある目つきだったと言える。

「ああ、冗談のつもりだったんだが、許可が下りたから折角なのでと思っついで。」

何故だろう、自らの口から出ている言葉が言い訳がましく聞こえる。

そんなはずはない、俺が言い訳…？

馬鹿な！

それはそうと、味噌汁のお椀の中心で箸が立っている。

棒読みで反省の色など感じられるはずもなくリンはへそを曲げたままである。

「わかった、こうしよう。次俺が同じ事をしたら、お椀ではなく俺の手を刺して良い。」

そういう問題なのかどうかはわからないが、俺が出来る最大限の譲歩だった。

「はあ……。」

すると呆れた様に温度の低い息を吐き出すリン。

リアクションが帰って来ただけ進展はあるようだ。

俺の選択はどうかやら間違っていないかつたらしい。

「その選択はないけど、お兄ちゃんに言っても無駄な事だよ、それよりもお椀ダメにしちゃってごめんなさい渚さん。そしてお兄ちゃんが変な事言っでごめんなさい。」

「あらあら、良いんですよ。」

ふむ、蚊帳の外だ。

これは許して貰えたのだろうか。

というか、リンは出会った時よりも随分と色々な感情を表に出す様になった。

これは色々と慣れて来ていると言う事なのだろうか。

それはきつと良い事なのだろう。

「うむ、丸く収まった様で何よりだ。」

「じー……。」

視線とは感情が籠っている居ないに関わらず殺傷性を持たせる事が出来るのだな、と俺は新鮮な発見に一人納得するのだった。

「さてこれからの事なのだが。」

リンはお腹が一杯になって満足したからか、それとも半徹の疲れが出たのか、あるいはその両方か、縁側で猫の様に丸くなって寝ている。

「そう言えばまだ何も事情を窺っていませんでしたね。聴いて良い事でしたら教えて頂けますと私としてもありがたいのですが。」

「そうだな、手短かに話すなら、俺はリンを拾った。リンは追われていた。家から出た所で追手に見つかつた。直接やりあつたら肩を刺された。俺はリンを連れて逃げた。その後気を失つた。そこから先は希理子が知る所だ。」

俺は事実のみを話す。

嘘は付いていない。

眞実を話しているとも言いがたい。

だがその限られた情報から希理子は考え、自らの意見を述べる。

「という事は、お家に戻るのには危ないのではないのですか？」

頭の回転が速くて居てくれる事は非常に助かる。

何より余計な事を根ほり葉ほり聴きだされぬ事だ。

「ああ、その通りだな。間違いなくあいつらは家の前を見張つてる。」

「うん、でしたら家にお泊りになられてはいかがでしょう！」

この場合希理子が家と言つたのは、このお屋敷という事だろう。

確かにこの広さだ、部屋は有り余っている事だろう。

が、それにも色々とリスクを伴う。

「有りがたい提案ではあるが、他人を巻き込むわけにはいかないという考えもある。まあ既に若干巻き込んでしまつて居る節はあるが、今ならまだ、俺達は他人から、赤の他人に。」

「お断り致します。」

戻る、という言葉を遮つて出てきたのは希理子から初めて聴いた、明確な拒絶。

彼女の顔を見ればさも当然といった笑顔を浮かべている。

「一度出会つてしまつた以上、私たちは知り合いです。私には、神様がくれた出会いを無碍にする事はしたくありませんし、自分に嘘も付けません。何より私には見捨てるなんてそんな発想はできっこないんです。」

その最後の言葉には、今までの言葉には無い重みがあった。

それが何であるかは俺にはわからないが、きっと彼女が今まで生きて来て経験した中にその答えがあるのだろう。

予測した所でわかるはずもない、むしろ予測するなどそれは俺の傲慢でしかない。

「そうか、ならば是非も無い　　と言いたい所だが、それでは結局の所、根本的な解決にはならん。」

俺はそう言っと思って事を切り出す。

「結局の所、奴らがリンを追い続けるからと言って俺達がここで死ぬまで匿われ続けるわけにもいかない。それはわかるな？」

私は別に構わないのですが、とボソッと聞えた様な気もするが、本心ではそれがどういう事を理解しているはずだ。

人の一生を左右する権利はその本人にしか存在しない。

「それに匿われ続けたとしてもいつかはバレる。時間の問題だ。」
あいつらが黙って家の前だけにへばりついていてるわけではない。

戻って来ないと考えれば当然捜索の手を広げるはずだ。

「である以上、結論は一つだ。」

「ま、まさか、戦うおつもりですか？」

「それ以外無いと言っならそうするまでだ。」

結論は簡単。

追手を潰してしまえば問題はない。

流石に追手をたった一人のガキに一掃されたとなればある程度の時間は相手側も手を出しては来ないだろう。

ただそれが出来るかの話なのだが。

普通なら無理だろうと思う。

だが、俺は幸運な事に　　いや残念というべきだろうか、普通ではない。

「そこで希理子、お前が協力してくれると言っのなら是非頼みたい事がある　　」

その日の夕方、ホームセンターで頼まれた物を買って終え、とある専門店に来ていた希理子は買い物メモの残りの項目に目をやる。

「いったい何に使うおつもりなんでしょうか……これ……。」

品目を見る限り健全な日曜大工に使うというわけではなさそうだがそんな事は関係ない。

一度得たものを失わないため、そのためならば自分は何でもする。そう何でもだ。

それは希理子が、あの時から、定めた自らの生き方であり、全てだ。

失うのはもう十分だ。

私は、私が出た物を、自分の出来る限りの力で守り抜く。

そう、誓ったのだから。

注文の品を一通り聞いた店の主人は訝しげな瞳で希理子を見た。

「……これ、何に使うんだい？」

私は予め彼から伝えられていたセリフを一点の曇りも無い笑顔で返した。

「学校の授業の実験です。」

その頃俺は希理子に案内して貰い入った歴史を感じさせる古造りの蔵の中で、埃を被った蔵書の数々に目を向けていた。

こういった中には必ずと言って存在する、実用的な蔵書を探すためだ。

蔵は全くと言って良いほど長い事開かれた形跡がなく、積もり積もった埃で蔵書のタイトルはいちいち見づらい。

使われている文字もかなり古い物で、読めない事は無いにしろその解読にも若干時間がかかる。

さらに言えば蔵書以外の、皿、壺、衣服、絵画、巻物等の骨董品の数々が邪魔をして中々搜索が進まない。

そうか、時代を考えるのなら巻物の可能性もあるのか。搜索範囲が増えてしまった。

だが、焦る事は無い。

時間はたっぷりとある。

それでも、無限ではない。

新学期まで一週間あるか無いか。

こんな事で入学式に出席できないなんて、折角入学の為に色々と用立ててくれた祖父母に申し訳が立たない。

そして何より。

俺自信の目的を達成するためにも、こんな些細な事で時間を浪費するわけにはいかない。

人生とは、時間が限られている物なのだから。

そんな事を考えつつ作業を進め、もう三つ目になるであろう書架の棚の埃を払う。

どうやらタイトルを見る限り当たりのようだ。

「ふむ、より質の高い物で有るといいのだが。」

俺はそう呟いて、蔵書を読み漁るのだった。

第一幕 第六章 『開戦』 (前書き)

以下略

第一幕 第六章 『開戦』

契が希理子に助けられた日から数えて二日後。

三日月の朧気な光が薄らとした雲間から蒼光を零す中、街灯に照らされた一軒の家を見張る一台の車が車道脇に止められていた。

中に坐して待つのは三人。

運転席で不機嫌そうに煙草に火をつけるジニー。

助手席で腕を組み、目を瞑って沈黙を貫いているトロイ。

そして不機嫌さを隠す様子も無く頻繁に舌打ちを鳴らし、バックシートで足を投げ出して横になっているアンジエだ。

ここで張り込み始めて二日、ターゲットは依然として姿を現していない。

ただでさえ前回の失敗で同僚から散々な皮肉を言われている。

皮肉をのたまう同僚を片っ端から殴り倒そうとしてジニーに止められ、結局ジニーを殴り倒してその場の怒りを鎮めたのだが、その後自分で自分を拾った直属の上司であり恩人である彼女にも言われたのでは怒りの矛先を他にぶつける訳にもいかなかった。

お陰で今朝までアンジエの手は包帯でぐるぐる巻きになっていた。

哀れ、自己に怒りをぶつけるために犠牲となったアンジエの部屋の冷蔵庫は今頃粗大ゴミとしてゴミ処理場に打ち捨てられている頃だろう。

アンジエの頭の中ではその時彼女に言われたセリフがぐるぐると渦巻いている。

それは普通なら不安を煽る物であるはずなのだが、アンジエの中ではそれは怒りに転換され渦巻く。

次は無いと思え。

「クソッ……。」

常に脳内を占有する怒りの矛先を車の防弾ガラスに定めて何度も蹴りつける。

「ガキを虐められないからって車を虐めるんじゃないやねえよアンジエ。

一応俺の車だぞ。」

「っせーんだよタコハゲ。そのための防弾ガラスだろうが。」

これについては敢えて言うまでもないだろう。

「にしてもあの糞ガキとロリコンナイトはまだ出てこねーのかよ！

クソツ！このまんまじゃアタシのケツがシートとくっついちゃう。」

「っはっは、そりゃ高く売れるだろうな。見た目に騙されて買った

奴には同情するが。」

「クソツ……おいトロイ！目瞞ってケツに根張ってるくらいなら外

回って探してこいよ！」

「おいおい、それが今まで半日ぶっつづけで見張りしてた奴にかけ

る言葉か？」

「うちの御姫様はマリーアントワネットなんて比べ物にならないく

れえ傲慢だからな。」

そう言っただけで笑ったジニーは視線の先に人影を見据えて居住いを正す。

そして先程までの軽口を叩いたものとは違う、仕事の空気を纏った

声で呟く。

「そんな必要も無くなったようだがな。」

それに対する返事はない。

ただアンジエは体を起こし、トロイは目を見開く。

車内の空気が張り詰める。

そしてアンジエは本来の重苦しい口調で開始の合図を告げた。

兎狩りの始まりだ。

「やっと気付いたか……本気で捕まえる気が有るのやら。」

それはたつた今、車からぞろぞろと姿を現した三人の表情を見れば問うまでもない事だろう。

「怖い怖い。」

俺は無表情に心にもない事を呟く。

メンツを見た限りはこの前と同じ。

禿頭の大男。

中肉中背の男。

そして相変わらずのハイエナ女。

あの内二人は一度は俺の即席トラップに掛かったまぬけだ。

ブービートラップ。

簡単に直訳すればまぬけのかかる罠といった所だが、その効果は局地防衛戦、逃亡戦に置いてまぬけとは言い難い脅威性を有する。

相手の心理の隙をついたトラップは敵に常に警戒心を解く暇を与えない。

実際に短い戦闘で有っても、その心理的負担は体感的戦闘時間を長期化させる。

精神的疲労は肉体的疲労に連動し、敵の体力を奪うものだ。

さて、要するに一度トラップに掛かった人間はトラップに対して普通以上に警戒を抱く。

これはトラップに相手が掛かる可能性を著しく下げる、と思われるがその実、敵の心理把握を容易にし、行動パターンを制限し、そのパターンに従ってトラップを仕掛ける事も出来るし、何よりトラップがあるとなっていて進む相手はより精神的に消耗する事になる。

以上の事から、前回とメンバーを変更してきた場合、多少とはいえ計算に誤差が生じる事にも為りかねなかったと考えればこれは幸運と言っべきだろうか。

唯一の不運、というには必然性に過ぎた事項ではあるが、あの女がやはり再度姿を見せたと言う事だろうか。

一度ため息をつく。

ちなみにリンや希理子には待機を命じてある。

わざわざ釣り針に餌を二つ付けてやるほどサービス精神旺盛ではない。

それに万一の場合、自分の命を保障する保険にもなる。奴らの目的は言うまでもなくリンなのだから。

今俺が位置するのは自宅の門前。

彼らのまでの距離はおよそ五十メートル程だろうか。

これから俺は茶番を演じなければならない。

それは偶然敵に見つかってしまったか弱い兎という配役。キャスト

だがそれが茶番である由は獅子の配役を有した彼らが最も理解してくれているだろう。

そうなる程度には痛い目にあってもらったつもりだ。

兎と獅子の仮面を纏った俺達は追跡劇チェイスレースという名の演目を演じる。

その仮面の下に鬼の素顔を有しているのがどちらなのかを、理解せぬままに。

一時の沈黙による空隙。

この静寂を先に壊したのは契だった。

アンジエ達と視線を合わせても終始同様した様子を見せず、無表情を貫いた揚句、背中を見せて一目散に逃げ出したのだ。

「やはり前回同様、一対多での直接戦闘は避けるか。」

呟きと同時にビリーが走り出す。

アンジエとトロイもそれに続いた。

逃げぶりにしても前回同様、フェイントと地の理を生かしたコース取りに契と彼らとの距離は離れるかに思えたが、その距離は中々開かない。

常に一定の距離が保たれた状態だ。

契はチラリと後ろを除き見る。

どうやら二日間遊んでいたわけではなさそうだ。

彼らもここら一体の地理を大分理解しているようで、コース取りによる有利が無くなっている。

もしリンを連れていたら瞬く間に追いつかれていただろう。

まあ逃げきる気など端から無いのだが。

樹木の用に枝分かれする小道を不規則に折れ曲がるコースを取っていた契が、気付けば不自然なまでの直線コースを走り続ける。

揺れる背中を見つめ続け、その光景に若干アンジェ達が慣れた瞬間、彼の姿がふつと消えた。

それは彼らの慣れによる視覚の緩みを絶妙に捉えたコース転換。

実際には小道を直角に折れ曲がっただけなのだが、その効果は大きく彼らは若干の焦りを感じる。

「つとに、ただもんじゃないな。」

呆れる様に呟いたトロイ。

だがそれは紛れもない心の隙だった。

彼は忘れていたのだ。

戦場では心に隙が出来た者から死んで行くのだと言う事を。

曲がり角を曲がって急に体を止めたアンジェとビリー。

だが気の緩みからそれに対応できず一步足を踏み出したトロイの足先、僅か十センチメートル程の距離から所々に鉄片が転がっている。三角錐の中心から各頂点へと鉄刺が伸びるような形のそれは文献でしか見たことのない撒菱そのものだった。

あと一步先に踏み出していたらその鋭い先端が足に突き刺さり、ダメージとしては大した物ではないにしろ追跡を続ける事は困難になっただろう。

「おいおい……忍者かよあのガキは。」

本来は敵の足止めに使用されるそれは道路の一带にバラ撒かれているが、散布した本人は逃げきる事をせず、相変わらずの五十メートル程先の距離からその様子を無表情に眺めている。

余談だが、撒菱は一般的に忍者が使つというイメージが強いが、実際は西洋での戦争時、騎馬や兵の進行を遅らせ、又その突進力を弱めるために使われたのが最初だという。

余談終わり。

アンジエはその先に立つ契の口端が微かに釣り上がるのを見る。

頭に血が上つて来るのを感じるが、投擲ナイフもこの距離では恐らく効果を成さない。

今は追うしかない。

再び背中を向けて走り出した契を、追いかけながらアンジエは血が上つた頭を向かい風で冷やしながら考えていた。

誘導されている。

これは確信だった。

走る姿を見ても全力で逃げきる気が無いのは明白だし、何より本来追跡を阻害する目的

を持った撒菱を攻撃、または挑発だろうか、そんな目的のために使用してきた所を見ても間違いない。

きつとビリーもトロイも同じ事を考えている事だろう。

だがそれでも追うのを止めないのは、それ以外に自分達に選択肢が無いからであり、追跡に於いて自分達は後手に回らざるを得ない。

そしてこの認識はこの先一瞬たりとも気を抜く事が出来ない事を意味する。

そして予想通りというべきだろうか。

彼が逃げ込んだ先は街灯の光もほぼ届かない、有刺鉄線に縁取られたフェンスに囲まれる荒廃した建物。

恐らくは工場の跡地だろうか。

フェンスに予め大きく開けられた穴を抜け、その先の草むらを抜けた闇の中に彼の背中が消えて行くのを目にする。

そこで一度足を止める。

「こりゃあ……。」

「ああ、間違いない、誘い出されたな。」

トロイの呟きにビリーが確信を持って答える。

「ちっ、気にいらねえ、終始あいつの手のひらの上で踊らされてる。」

「そう、現状それは誰が見ても偽りの無い事実だ。」

「だがな、罨があると分かかって掛かる程俺達だつてまぬけじゃあない。それにあいつの目的は恐らく逃げる事じゃない、俺達を潰す事だ。である以上、あいつは俺達を常に捉えた位置にいるはずだ。それはこちらにも攻撃のチャンスがあるという事実にはならない。」

「そう言つて一息ついたビリーはいつも通りのトロイを前衛に据えた陣型を意識し動いた。」

言葉もないその動きに答えアンジェとトロイも体に染みついたその陣型へ移行する。

「いくぞ。」

「ウイルクッ！」

こうして、ここをお互いの墓場とすべく戦いが幕をあけた。

第一幕 第七章 『終幕』 (前書き)

フィクション云々以下略

第一幕 第七章 『終幕』

「んむう……お兄ちゃん遅いね……？」

「そうですねー、コンビニに行くだけにしては時間がかかっていらっしやるようです。」

目を擦りながら眠気と戦うリンを傍目に、希理子はまったくワザとらしく見えない笑顔を浮かべる。

リンは彼が、今頃戦っているであろう事を知らない。

リンにそれを言えばきつと彼に付いて行こうとするだろう、という彼の思案の結果だ。

だがリンなりに何か違和感を感じているのだろう。

昨日なら既に熟睡していた時間帯で有るにも関わらずリンは睡眠に抗い続けている。

「リンちゃん、大分眠そうですねが大丈夫ですか？」

「うーん……眠い……けど、もうちょっと……待ってるう……ふわああ……。」

大きく欠伸をかいて目尻に涙を浮かべるリンの頭を希理子は優しく撫でた。

「……早く帰って来るといいですね。」

紡いだ言葉はリンに向けられて放たれたにしてはそれに相応する大きさを伴って居なかった。

つまる所それは自らに向けられた言葉であり、そこには希理子が抱くはずのない（……不安という感情が確かに含まれている事には、希理子自信気付く事は出来なかった。

そこにあるはずの無い物というのは、案外見つけられない物なのだ。

そしてその事を違った形で実感している三人が居る事など、彼女には知るよしも無かった。

「おいおい……、冗談だろう……？」

そう呟いたのは陣型における先行偵察を担うトロイだ。

その発言は眼前にぽっかりと空いた草むらで巧妙に隠された穴の中でカラカラと音を立てて回る二本の円柱形のローラーの様な物を指している。

ただのローラーではない、その表面からは鋭く削られた木片が所々突き出している。

「ベトナム戦争で使われたブービートラップの一種だな。引っかけたいたら足がボロ雑巾みたいになつてた所だ、比喻とかじゃなく。」

そう呟くジニーの顔は笑っている様だが、微かに引き攣っている。穴の端を踏んだ事で穴を塞いでいた枝が折れ、上に被さった木の葉や土砂が崩れたのは幸運だったと言う他無いだろう。

トロイも気を抜いたつもりは無かったが、穴の隠蔽の仕方が素人のそれとは思えない物だったために視覚ではとても判別できなかったのだ。

「少なくとも法律を守るとかそんなチャチな心構えじゃ無いってことか。」

ちなみにこういった殺傷を目的としたブービートラップを仕掛ける事はまごう事無き犯罪行為だ。

この前の学校でのトラップは電気を利用した物が主であり、その目的は殺傷というより対象の無力化に重点が置かれていたが、今回はどうやら殺傷を目的としている節がある。

「……刺の先端が若干湿ってやがる。何か塗ってあるみてーだな。」

「うむ、殺しに掛かってきてると見て良いかもしれんな。」
アンジェが独白し、ジニーは息を飲みつつ呟く。

「ストップだ。」

再び進み始めて十秒もしない内にトロイが声を発する。

同時に歩みを止める残り二人に説明もせず手ぶりで後ろに下がる様指示を出す。

二人が下がったのを確認し、トロイは少し後ろに下がると同時に、転がっていた小枝をその先の草むらに投げる。

宙を舞う小枝が、低い位置に張られた釣り糸に触れた瞬間、僅かな振動を敏感に感じ取り仕掛けが作動する。

草むらと木陰に隠された位置、一端は地面に刺さりもう一端が撓ったまま地面すれすれに固定された半分に割られた竹。

それが糸の僅かな振動で解き放たれ、一端が風切り音と同時に飛来し空を切った。

仕掛けが張られていた地点、丁度大人の背丈での胸部の辺りを通過する。

作動後、地面から生え揺れるその先端を見れば、例の如く鋭く尖った竹の棘がブラシの様に何本も突き出ている。

「次はスパイクボールもどきか。これも何か塗られている様だな。」
もはや驚きはしない、ただ今まで以上に警戒を強めるだけだ。

じりじりと、だが着実に前へ進んでいく。
それほど距離が無かったはずの草むらを十分程掛けて抜ける。

結局落とし穴とワイヤートラップの二つ以外にトラップは仕掛けられていなかったのだが、精神的にはやはり三人とも必要以上に疲弊していた。

草むらを抜けた先には廃工場であるはずの大型の建物に電気が灯っていた。

「まだ電力系統が死んでいないみたいだな。」

「掛かってこいつて所か。」

「上等じゃねえか……所詮ガキの浅知恵だ。」

戸口は既に開かれていた。

トラップを仕掛けるのに戸口程効率のいい場所は無いのだが、それが既に開けられていると言うのは此方を歓迎するという証なのか、それとも更に何かトラップを重ねているのか。どちらにしる常に警戒が解かれる事はなく、慎重にその歩みを進める。

中に入るとそこにはただ広い空間が広がっていた。機材等は既に運び出されているのだろう。

奥に伸びる長方形の空間、両サイドの階段から二階通路に上げられる造りになっているが、階段や通路自体も所々が崩れ落ちているために人が通るには少々困難な状態となっている。

広いスペースには不自然に大きな水たまりが広がっておりそのスペースの八割程度が浸食されている。

あとは残り一割ずつ程の細いスペースをその両端に残しているのみだ。

「分かりやすいトラップしかかけやがって、おちよくってんのか……。」

そう呟いたアンジエの視界には水溜りを越えた向こう側、壁から伸びる途中で断裂した太い銅線が水溜りに浸かっているのが映っている。

「水溜りにつつこんだらバリバリってか。水が白く濁ってやがる、ご丁寧に混ぜ物までしてあるぜ。」

水には電気抵抗を減らす為に何かを溶かしてあるようだった。

「くだらねーな。」

そう言つて水溜りの無い空間の端に足を向けたトロイはその細い道を見て足を止めた。

「おいおいおい……こりゃ悪い冗談だろ……。」

それもそのはずだ、そんな物騒な物が現代の日本という国に存在していないはずがなかった。

道全てを覆う様に張り巡らされたワイヤー。

そのワイヤーを辿ってみればそれは扇状の飯盒の様な形をしたブ

リキ缶に繋がっていた。

そのブリキ缶から更にワイヤーが伸び、高い壁伝いに三つ程の同じ様な扇状のブリキ缶に繋がっている。

それが、本物ならその射程距離は恐らく水溜りよりこちら側の空間を全て覆う程度の物になるだろう。

「旧式のクレイモヤ地雷か……？」

「仕掛け方はお粗末だが、恐らくそうだな。一体どうやって手に入れたんだか……。」

クレイモヤ地雷とは、簡単に言えば指向性散弾地雷だ。

有効射角約六十度、有効射程約五〇メートル、最大射程は約二五〇メートル。

一発一発が強力な空気銃程度の威力を持つ数百個の鉄球を。

このタイプはワイヤーが引かれる事で信管が炸薬を起爆させる物だ。

しかも一つが起爆すればその衝撃で同時に四つが作動するように改造してある。

これまでの物とは違い、この仕掛け方は確実に殺害することを目的としている事が窺える。

「解除するから三分待つてくれ。ただ万一のために外でな。」

本来トロイは戦闘関係よりこう言った工作作業を得意とした要員である。

そのトロイが解除できると言うのであれば間違い無いだろう。

「ウィルク。」

静かにアンジエはジニーと共に元来た入口を出た。

お互いに声を掛ける事も無く、そのまま凡そ一分間が過ぎた時、中から現状最も聞きたくない音が聞こえた。

バシユツつという音に続く複数の連続する火薬の破裂音だ。

同時に先程まで付いていた工場内の電気が一つ残らず消えた。

アンジエは全身から嫌な汗が噴き出るのを感じた。

ペンライトを付けお互いの姿を確認する。

ジニーと目を合わせ、言葉も無く扉を開き、細い小道ではなく水溜りの中に倒れ痙攣を起こしているトロイを目にする。

先を照らしてみると小道に何かが落ちているのが分かる。

そして先程の音を思い出し、落ちているそれをもう一度見て理解する。

ひとまずトロイを水から引き上げる。

グローブは絶縁性の物を使って居るので感電の心配はない。

その際にトラップワイヤーに引っ掛かるが当然そんな事は気にしない。

クレイモヤトラップは『ダミー』だったのだ。

ブリキ缶の立脚に結び付けられた細い釣り糸が薄く積もった土の中から飛び出している。

そしてその細い糸は巧妙に隠されて天上、つまり二階の床下まで伸び、その真下には爆発したと思われる何かと、着火した爆竹の残骸が煙を上げていた。

シナリオは恐らくこう。

ダミートラップを解除しようとしたトロイはトラップ解除をしようにとした人間を目的とした二重のトラップを起動させてしまった。

そして恐らくあの残骸、先ほど聞いた最初の音からするにフラッシュグレネード。

それもこの間使われた物よりもサイズも大きい。

ただでさえ命を掛けたトラップの解除には桁外れの集中力を要する。

トロイは恐らくその解除トラップを発動させた事で己の死すら予見した事だろう。

そして待っていたのはフラッシュグレネードにより視界を遮られた状態で連続する銃声に似た破裂音。

最大限の緊張状態でそんな事が起きれば誰でも錯乱状態に陥つてもおかしくはない。

そしてすぐ隣にある水溜りに足を踏み込み今に至るといふ所だろ

う。

「……人間の心理的な動きを上手く予測してる。」
重苦しく呟いたジニーは気を失っているトロイを見る。

早めに引き上げたお陰か息はしているようだが、当分は目覚める事も無いだろう。

そんな時、不意に声が聞こえる。

「ふむ、美女と野獣で残り二人か。この間よりはやはり警戒してるみたいだな。」

声のする方をライトで照らすと水溜りの向こう側で唯一の扉から体を出して此方を見る契の姿があった。

「やあ、どうだね、たった一人のガキの手の平の上で踊らされる気分は。」

「……こんのつ、糞ペド野郎！今すぐ掛かって来い！ハラワタ引き摺り出して蝶々結びにしてからあのチビ餓鬼の頭押し込んでやる！！」

激昂するアンジェの瞳を冷ややかに見据える契は、もう一人、ジニーの方へも視線を送るが、帰って来たのは沈黙のみだった。

「ふむ、まあそう焦らずともこの先で待っているさ。気が向いたら来ると良い。」

そう言っつて契はその鉄の扉の向うに幽鬼の如く消えて行った。

「アンジェ、敵に感情を見せるのはお前の悪い癖だ。下に見られるぜ。」

「やっつてる最中に下に見られたってかまやしねーよ、相手が逝く瞬間は何時だつてアタシが上さ。」

立ち上がりながら言うジニーに、ペンライトを持っていない左手で腰から逆手にアーミーナイフを抜きつつアンジェが答える。

それに対してジニーは渋い顔で返す。

「見つけてもまだ殺すなよ。あのガキにはチビガキの居場所を吐いて貰わなきゃいけないんだからな。」

「脳味噌と舌さえ無事なら喋れるさ。それ以上アタシは保障出来ないね。」

だめたこりゃと軽く芝居がかった様子で首を捻ったジニーは、電力系統が落ちているとは思われたが一応水溜りを避けて小道を進む後に続くアンジェの瞳はこれ以上ない程にぎらついている。

契が消えて行った鉄扉の前に辿り着く。

ペンライトで扉を照らすと一枚の張り紙が貼ってある事に気づく。内容は、ここから先に進むなら命の保証は出来ないといった物だ。アンジェが勢い余って貼り紙を破りそうになるが無言のままジニーがその手を掴み止める。

そしてペンライトの光を貼り紙の右下隅まで持って行くと細く光を反射する物が見える。

それは細い糸で大きく周り道を描いて真上まで続いている。

ライトで上を照らすと何か液体の入ったガラスの瓶が釣るされているが見える。

「まったく、お前の行動パターンをお前自身よりも理解してそうだぜあのガキは。」

「けっ……。」

言葉を交わしながらお互い一歩下がり、アンジェが敢えてナイフでその糸を切断すると液体入りのガラス瓶が扉の前で破砕音と共にその中身をぶちまけた。

当然、貼り紙を破り捨てようとしようものなら液体を頭から被る事になっていただろう。

明らかに化学変化が起きている風な音を立てながら白い煙を立てている所を見る限り頭から被って幸せに慣れるような類の薬品ではない。

貼り紙の内容もあながち嘘という訳ではなさそうだった。

さて、と独白しアンジェに手振りて扉から離れる様に指示するジニー。

しびしびという様子でアンジエがナイフを仕舞いながら退くのを確認後、扉をあけると同時に自らも扉を盾にする様に脇にそれる。

すると当然の如く風を切る音と同時にしなつた竹の先端に付いたスパイクボールが扉の向う側から飛び出した。

アンジエなら顔面が頭部、ジニーならば胸元から喉にかけてがある場所辺りを通過する。

反動で揺れ続けるその刺の塊を見て肩をすくめるジニーと、視線を微動だにしないアンジエはお互いに目を合わせ、また視線を扉の奥に戻した。

そこでまた目を丸くする事になる。

扉の向こうには姿見が設置してあった。

一見無駄な配置に見えるが、もしそのまま扉を開いていた場合、電力系統が落ちている今ペンライトの光が反射され一時的に視界を塞がれていたはず。

そうでなくとも目前に現れた自分自身の像を反射的に確認してしまっていた事だろう。

その一瞬を必要とする動作には反射的な回避運動を阻害する効果がある。

「ったく手の込んだ真似しやがって……」

そろそろお決まりパターンとなりつつあるトラップに辟易しつつジニーを先頭に扉を跨いだ。

その瞬間だった。

一瞬の擦過音と風切り音。

と同時に鋭い何かか肉に突き刺さる音がした。

アンジエの視界はジニーの体で塞がれており前方で何が起きたのかはわからない。

「おいジニーっ、何が」

ジニーの肩に手を置いて気付いた。

彼の体には力が全く入っていない。

そのまま倒れ伏すジニーの胸には細い鉄パイプを加工した矢が突

き刺さっていた。

ライトを照らすと鏡の下部に小さな穴があいている。

先程見た時はそんな穴空いていなかったはずだ。

だが改めて下を見ると穴を丁度塞ぐサイズのアルミ箔が落ちてい
る。

本当に殺す気で来ている。

あの命の保証はしないという表示は虚勢や出まかせの類では無か
った。

そして気になるのは矢を放ったトラップの起動要因。

今まではワイヤートラップがメインに使われていたがこちら側を
見る限り鏡の裏から糸が伸びている様には見えない。

部屋全体を軽く照らしどうやらここは工場の事務室だと判断する。
埃が薄らと積もった書類用ロッカーやホワイトボード、業務用デ
スクや中央には大きな机が位置している。

静まり返った室内に人が居る気配は無い。

だが間違いなく今先程まで奴が居たはずだ。

矢は手で発射されたと考えるのが自然。

恐らくは二回目の扉を開く音を合図に。

トラップだけに警戒していると足元を掬われる。

普通に考えるのならば心が折れて引き返している所だろう。

ただでさえ致死性を持つブービートラップが人に与える精神的負
担は並はずれた物ではない。

この時世に死と隣り合わせの時間を経た事のある人間がどれほど
居るだろうか。

アンジエでも修羅場を潜った回数など数えるほどだ。

それですら命を危険に晒す程の物では無かった。

だが、それでもアンジエの頭の中に引き返すと言う選択肢が現れ
る事は無い。

それは幸か不幸か、彼女が契約により無くした感情、そして残し
た感情による副産物で有ると言える。

彼女が身体能力を得るために支払った代償は、怒り以外の感情。故に彼女は迷わない。

彼女を突き動かすのはただ純然たる怒りのみなのだ。

そして怒りという感情はこの時ばかりは彼女から冷静さを奪う事はなかった。

むしろ怒りにより血が上った状態が続いた事を要因とする怒りという感情に対しての慣れ。

それが今彼女に冷静さを与えている。

入口でこれ以上のトラブルが発動する事は無い。

それなら入口からまずクリアリングを済ませる。

視界が届く場所という場所全てにライトを当て安全を確認して行く。

すると当然の事ながら見つかった。

これまた信じがたい物が瓶に詰められた状態で天上付近の換気扇にセツトされていた。

「Mk-2手榴弾……パイナップルか。アントルメかフルユイって意味じゃ確かに洒落が聞いてやがる。」

アントレかロティーが先程のダミークレイモヤって所だとするならジニーはサラダで食中りって所か。

アントルメ、フルユイ、アントレ、ロティー、サラダ、いずれも西洋フルコースメニューの呼び方だ。

若干下らない事を考えつつ、随分と凝ったサラダを出す店だと冷めた視線でヘタの抜かれた瓶詰パイナップルからご丁寧に伸びるワイヤーを目で辿る。

手榴弾は基本的に安全ピンが抜かれレバーが外れてから数秒で炸薬に火が付き鉄破片を撒き散らす割とポピュラーな殺傷兵器だ。

加害範囲は半径一五メートル程だと言われている。

この部屋で言うなら中央で爆発されると逃げ場が物陰以外無くなる程度の範囲だ。

そんな物騒なデザートが部屋の隅に位置する換気扇に挟まってい

ると言うのは余り気分のいい物ではない。

ちなみにワイヤーは壁伝いを通って少し先の床に張られていた。

これも根元から追って行かなければ気付けないような巧妙な隠し方をしている。

だが糞物騒だと思つ反面、アンジェの頭にはもう一つの可能性が浮かぶ。

先程のクレイモヤトラップに関してはダミーだった。

恐らくはただ外装を似せただけのブリキ缶だろう。

そうなるに奴の使用したトラップには共通して、火薬が使用されて居ない。

簡単なフラッシュグレネードは使用しているがそれは別格だ。

あの手榴弾もダミーである可能性が無いとは言い切れない。

先程と同じく、解除の際に連動して発動するトラップが仕掛けられている可能性もある。

まあ長く考えてしまったがどちらのパターンにせよ、不用意に触らず起動トラップにも掛からなければ問題は無い。

そう思い、足元に気を付けつつ部屋を進んでいく。

部屋の中央まで進んだ所で大机の上一枚のメッセージカードが置かれているのに気づく。

明らかに罠の香りがする。

だがその表には、男が書いたにしては几帳面な整つた文字で、
o r p u r s u e r と書いてある。

紙の周りを見るが糸が付いている様子もない。

「回りくどい真似しやがって……。」

そのメッセージカードを手を取った瞬間、二つの事に気づいた。

一つはそのメッセージカードの裏面に書かれた文字。

『 This is the last trap . If it
survives here , next , I will da
nce with you . 』

日本人特有の丁寧過ぎる英語。

何のために英語にしたかなんてだいたい予想はつく。

此方の判断を一時でも遅らせるためだ。
内容からもわかる。

それはこのメッセージカードがやはり罠である事を示している。
そして気付いた二つ目、手に取った際に明らかに明らかにメッセージカードの重さを越える重力と、同時にその重力からの解放を感じた。

メッセージカードが置かれていた机には細くだが、錐か何かで穴が開けられており、メッセージカードの裏にはテープでワイヤーを張り付けていた後があった。

同時に机の下からガラス瓶が落ちる音と重苦しい鉄の塊が転がる音が聞こえる。

微かに鉄同士がぶつかる様な音も聞こえたがそれは間違いなく安全レバーが外れる音だった。

体中から嫌な汗が噴き出す。

これがダミーであるはずがない。

奴が意味の無い仕掛けをしていた事は一度も無い。
考える前に体が反応し机の端に飛び乗る。

机の隅に落下運動で多少増加された人一人分の重さが一気に掛かり、飛び乗ったのは反対側の足が少し浮き上がる。

同時に机の両端を掴みそのまま勢いを利用してこちら側に強引に引き上げる。

かなりの大きさの机だが、強化されたアンジェの力で机は部屋の中央で立ち上がり盾の役割を果たす。

それから一秒も立たず机を抑え込んだアンジェの体に強い衝撃が走り、ゼロコンマゼロ数秒遅れて指を耳栓にして両耳を塞いでいて尚、耳を劈く様な爆発音が響き渡った。

当然ながら爆発は一秒も立たずその猛威をふるい終える。

衝撃に備え閉じていた瞳を開くと対面に見える壁が綺麗に長方形を残して鉄片で抉られている。

立ち上がり部屋全体を眺めると上下左右至る所が見る影もなく破

壊されている。

換気扇にセットされていたほうはやはりダミーだったようでレバーが外れた状態で粉々になった瓶の破片と共に台所に転がっている。体を確認するが外傷はない。

若干耳鳴りが残っているがさほど気にする程の物でもない。どうやら契が言うところの最後のトラップとやらを潜りぬけたらしい。

クレイモヤトラップは前菜、オードブルに過ぎなかったといった所だろうか。

何故換気扇にダミーを使用したのか。

それだけが若干心残り、というよりは疑問だった。

両方とも本物を使って居れば同じ様に机を盾にしたとしてもその方向次第、五十パーセントの確率で鉄片によりミンチにされていたはずだ。

まあ過去の仮定などした所でどうにもならあない。

今は自分が生き残っているという結果を居るかどうかも怪しい神様とやらに祈るべきだろう。

あとは、扉の先に待つあのいけすかないロリコンを八つ裂きにしたら、おっと勿論それはチビ餓鬼の場所を吐かせてからに話だが、仕事は終わりだ。

下の階で寝ているトロイを引き摺って、生きているかどうかは知らないが扉の外に引きずり出しておいたジニーも回収して、家に帰って熱いシャワーを浴びればあとは寝るだけだ。

三度目は無い。

正面から遣り合えばあの糞に遅れを取る様な事は無い。
有る筈がない。

この前は完全に甘く見ていた結果、相手の手中にハマってしまったが、近接戦闘に於いては自分に並ぶ者など少なくとも組織の中にも今まで出会った人間の中にも居なかった。

次は会話をして時間を稼がせるつもりもない。

姿を見せたら即取り押さえれば良い。

部屋に入ってからの流れを想定しつつ、アンジェは最後の扉を憂いなく開いた。

最後の最後にトラップが仕掛けて有る、等という無粋な真似はしなかった様だ。

何の問題も無く開いた扉の向こう。

長細いロッカールームからロッカーを取り除いた様な構造の真っ直ぐ一本の部屋。

出口は今アンジェが入って来た扉と、部屋の奥、パイプ椅子に坐して沈黙する彼の背後にあるたった一つの窓だけだ。

大きく開かれた窓から流れ込む冷たい夜風が頬を撫でるのが激しい動きを終えて火照った体には気持ち良い。

「……生きていたか。」

「……。」

呟きつつ顔を上げた契にアンジェは無言でもって返答する。

そして徐に一本、投擲用のナイフを投げる。

だがそのナイフは彼の頭上を掠めていくだけだった。

勿論外してしまっただ訳ではない。

敢えて外したのだ。

そしてそのアクションに対する契のリアクションを見て確信する。

彼は全くと言って良いほどその動作に反応しなかったのだ。

出来なかったのではない。

しなかった。

この間の戦闘でこいつは私のナイフを確かに避けた。

今までに投げた相手に一度として（……）、一度としてだ、避けられた事が無かった。

それどころか反応を示せた人間すら皆無だったそのナイフを避けたのだ。

それも予め飛んでくる場所が分かっているかのような最小限の動作で。

「まさかとは思ったけど、アンタ人の思考が読めるのか？」

「だったらどうする？」

その返答は実につまらなさそうな物だった。

余りに感情の無い呟きにアンジエの神経を逆撫でする程だ。

だが逆にソレをもって確信する。

「アンタも、契約者だね。」

今までに出会った事は無かった。

だからと言って自分だけが特別な存在だと思いこむ程アンジエは子供では無かった。

必ず居るはずだと考えていた。

そう、自分と同じ、感情を代償に支払って力を手に入れた人間が。

「……お前もあの淫魔に誘惑されたのか。その年齢と体格の女にしては馬鹿力が過ぎる訳だ。」

予測が確信になる。

「言葉はもう必要ない。アンタが心を読むならそれでいい。ただアタシはアンタの思考が追いつかないレベルで、動けば良いだけだから。」

言葉と同時にアンジエの体がぶれた。

その寸前に見えたのは彼女の右手が腰の後ろに伸びる動作。

動作の開始点からトップスピードまでの加速時間を極端に短くする事で、視覚は物体を見失う、はずだった。

だが契は正確にアンジエの姿を捉えている。

その動きは人間の出来る限界を軽く超えていた。

開始と同時に左に体をスライドさせ直後に跳躍、壁を足場としてさらにもう一段の跳躍。

その程度の動きでアンジエの体は天上付近まで上がっていた。

そして飛び上がると同時に体の重心を反転させ、天上に足を付け、その体に掛かる力のベクトルが上昇方向から下降方向へ転換する前に天上でもう一段跳躍する。

「忍者じゃあるまいし……。」

無感情に呟いた契はは確かにアンジエの瞳を捉えた。

その光は明確に此方を捉えている。

この前はハイエナと評価した瞳だがそれは間違いだったかもしれない。

あれはハイエナなんてもんじゃない、ヒョウかピューマかソレ以上か。

獅子はやはりアンジエの方だったのかも知れない。

そんな事を考えつつ、飛来する物体から回避動作を取るため、立ち上がると同時にパイプ椅子を端へ蹴り飛ばし、そのままバックステップでアンジエの落下予測地点から離れる。

契が跳躍すると同時に、天上を跳ねたアンジエの体が鋭く飛来する。

右手に握られた刃渡り三〇センチメートルはあろうかというアーミナイフを体を捻り着地に備えながら構え、落下と同時に振り下ろす。

正確に肩の付け根を狙ったそのナイフが空を切る。

だがそれはアンジエの踊る舞踏の序曲に過ぎなかった。

着地と同時に振り下ろされたナイフがその落下運動の制御に必用な力のベクトルを感じさせない様なバネの用な動きで急速に跳ね上がる。

きつと普通の人間がやれば今の動作だけで間接が外れて居てもおかしくは無い様な動作だ。

跳ね上がったナイフはバックステップした契の体を追いかけるが、ステップの着地に一瞬間に合わず、契が体を横に逸らした事で再度空白を突いた。

彼女の攻撃はまだ続く。

空に突き出されたナイフを伸びきった腕を全く使わず小手先の動きだけで逆手に持ちかえ、サイドに体をずらした契の体を更に追いかける、さらにその一撃を躲されると今度は伸びきった腕に引っ張られた体をそのまま一步のステップで加速させ、体を回転させると

同時に右で大振りの蹴りを放つ。

その足を左腕に右手を添えて受け止めると全力で鉄パイプの一撃を受けるような衝撃が左腕に響く。

激痛は神経系を通り脳に届くがその痛みの情報から左腕の骨がいったたである事だけを取り出して冷静に判断し、攻撃を受け止める事を諦める。

アンジエは大きく振り出した右足により増した回転運動に身を任せ、体を捻って左足での後ろ回し蹴りを更に浴びせる。

契はそれが不可避で有る事を悟り、既に使い物にならないであろう左腕をクッションにその一撃を凌ぐと同時に次の一撃から回避するべく更に後ろへ距離を取った。

左腕を盾にした際確実に骨折したと思える生々しい音が鳴り響く。一方まるでゲームの様な空中コンボを決め終えたアンジエは一度着地して姿勢を正す。

その姿には一点のブレもない。
息が乱れている様子すら皆無だ。

しかしその表情には先程よりも更に明確に浮立った怒りが見てとれる。

全ての動きが常人なら目で追うのすら困難なはずなのだ。
捌ききれぬはずがない。

思考を読む程度では不可能なはずなのだ。

それも自分と同じ様な年齢で、恐らくは数える程も実戦を潜りぬけた経験を持たないド素人がだ。

「何を隠してやがる……」

思わず呟いたアンジエを、左腕の激痛がまるで無い物かのような無表情で冷ややかに見る契は質問には答えず返事を返す。

「所詮お前はその程度という事だ。」

「ふ、ふふふっ、あつははははっ、最高だよアンター！」

怒りとは突き詰めれば感情の高ぶりだ。

怒りと喜び、過程は違えどそれが限界に達した時、人はこのよう

になるのだろう。

狂気染みた瞳で笑うそれを、外気よりも幾分か冷めた瞳で見つめる契に、アンジエは言葉を続ける。

「左腕はぐしゃぐしゃで痛み以外の感覚なんて感じないだろう！その上アタシは無傷！それどころか反撃一発繰り出す暇無いじゃないか！」

その言葉はまるで、自分自身に言い聞かせる様な独白染みた響きに満ちていた。

いや、むしろ契にはそう聞えていた。

「ふむ、現実から目を逸らすな、と言っても無駄なのだろうな、では先に言っておいてやろう。」

上着を脱ぎ捨てた契の胸元には赤い点滅を繰り返す卵程の大きさを持つ機械が張り付いていた。

「まず一つ、お前が俺を殺した場合、もしくはこの装置が俺から無理矢理に剥がされた場合、この建物が吹き飛ぶ。この心臓の装置が心音を検知しなくなると同時に倉庫の基礎を支える各柱に設置した爆薬が爆発する仕組みになっている。そして二つ、お前らの目的で有る所のリンは知り合いに託してある。俺からの連絡が一日以上途絶えた場合、一年間は幽閉するように言い含めてある。三つ、俺はまだ本気を出していない。とまあ、以上がお前がその程度の物であると俺がお前に対して評価を下した理由だ。」

そう言っで一息付き、アンジエの返答を待たずに言葉を続ける。

「つまりお前は、俺を殺さず、気を失わせ組織が何かに連れ帰って拷問にでも掛けて無理矢理俺に口を割らせるか、精神的に敗北を認めさせるしか無いという事だ、果たして怒りにまかせたお前のその動きでソレを実現しうるのか、まあ当然否だ。むしろ敢えて言う、それ以前にこれからお前は俺に一発も攻撃を当てる事も出来ずに負ける。」

そこまで言っつてしゃがみ込んだ契は隅に転がった鞆から一本の警棒を取り出す。

長さは三〇センチ程度と言った所だろうか。

ソレを右手に持ち、右半身を正面に構え俯くアンジエを見据えた。そして気づく、アンジエの様子がおかしい事に。

先程まで溢れだしていた怒気が感じられない。

だがその分、異様に増している何かが肌をひり付かせる。

「 言いたい事はそれだけ……？ 私はもう死んでもいい……貴方を殺したいの……ただ、それだけ……。どうせ任務を失敗して組織に戻れば待つてるのは死だもの……。それなら私は私がしたい様にして死ぬわ。」

それは今までのアンジエでは無い、明らかに別の人格。

「多重人格、という訳ではなさそうだな。敢えて予測するならば、元人格といった所か。」

契約により感情に偏重をきたした人間は総じてそれまでの人格とは全く違う人格を有する様になる。

それは自分自身で何となく理解していた。

だがもし一つの感情の残滓を限界まで膨らませた場合にそのような現象が起こるといふのならそれは驚きを示さざるを得ない。

一体どういふ原理でそのような事が起きているのかはわからない。感情を器として定義するのならば、一つの器が溢れだす事で別の感情を誘起すると言ふのは良く聞く話だ。

怒りが余って泣きだしてしまう。

怒りが余って笑いだしてしまう。

逆も又しかり、別も又しかりだ。

だがそれが感情をすっぽりと奪われた人間に適応される理論であるのかはわからない。

例えば奪われたのが感情の器自体であった場合、溢れだした感情が貯まるのは一体どこなのか。

それは考え始めれば切りのない、それこそ宇宙創成について考える様なものだ。

だから俺は思考を中断し、ただ目の前の少女を見据えた。

「聞けるうちに聞いておくよ……貴方の名前は……？」
問われた契は一拍考えた後、その問いには答えを返す事にした。

「夜永 契。」

それは気まぐれでしかない。

彼にとっては名前などどうでもいい物だ。

では相対するこの少女にとって名前とは何か特別な意味を持つ物なのだろうか。

「契、ふふ面白い名前。でもね、私には名前なんて無いの。だって私はアンジェだもの、それは名前じゃない。私を示す記号。

悪魔の枝に実った一つの果実の名前に過ぎない。花粉を運んでくれた虫さんは私が殺しちゃったしお花はとっくにかれちゃった。だから私はアンジェ。それ以上でも以下でもない。」

さっきまでとは別人の様な年相応の笑顔を浮かべ、右手のナイフを握りしめるアンジェを見つめる契は考える。

彼女もまた被害者なのだろうか。

だが被害者が可愛そうだと言うのはただの一面的答えに過ぎない。そう、日本語に答えが複数存在するように、全ての存在には複数の答えが存在する。

いや、答えなど存在しないと云うべきだろうか。

被害者にも突き詰めれば何か責任が存在する。

総合的に見てどちらが悪いかなど他者が勝手に定めた基準でしかない。

それにしても今日は本当に下らない思慮に耽る事が多い日だ。

結局の所、人は自分が信じ、想う道に進むしかないのだ。

それが例え、自分にとって益に働く物であろうと、不利益に働く物であろうと。

結論は最後にしか出ないから面白い。

また最後に出るとも限らないから面白い。

それが契が生きる上で『答え』という言葉に関して抱く想いの全てだ。

そして契は言い放った。

「では楽しもう。答えの出ない戦いを。」

言葉と同時に初動を取ったのは契だ。

右半身を前方に向けた構えのまま、右足の膝を折り始めると同時に左足で地を蹴り初動のスピードを稼ぐ。

そして重心が完全に右足に移ったのを感じると次に右足で地を蹴る。

一時的に体を浮かした状態からの二段加速による突進。

同時に振りかぶった警棒を上段に構えて真つ直ぐに振り下ろす。

対してアンジエはその一撃をナイフの腹で受ける、ように見せて体全体を右にずらした。

狙いは重い警棒の一撃を直接受け止めず、左斜めに受け流してからの反撃。

だが其の狙いを読み切った様に、振り下ろされる警棒は軌道を変えた。

狙い澄ましたかのようにアンジエが体をずらした方向への軌道変化。「ふふっ、いいわっ、そう、この感じよ！」

本心から楽しそうに声を上げ警棒をそのまま右手のナイフで受け止め、瞬間左手で腰元の投擲用ナイフを契の顔面へ向けて投擲する。ほぼ0距離からの投擲。

避けられるはずの無いそれは人間の最も堅い部分により止められた。

アンジエは金属同士がぶつかる様な音聞くと共に信じられない物を見た。

歯で止めたのだ。

驚きと同時に左の脇腹に対して鈍く重い衝撃が響く。

アンジエの軽い体は吹き飛び壁に叩きつけられる。

警棒を振り下ろした後タイムラグを惜しむ様に右足での横薙ぎの蹴りを繰り出した後、ペツッと啞えた刃を吐き捨てて、

「真剣白歯取り、というらしいぞ。どこかの漫画に書いてあった。

などと飄々と語る契は相手が少女で有る事など忘れ去ったかのように壁に打ち付けられたアンジエの頭部に目掛けて警棒を振り下ろした。

だがその警棒は壁を叩く事になる。

寸前に素早くしゃがみ込んだアンジエは立ち上がる際の脚のバネを利用して契の喉元に目掛けて白刃を伸ばした。

しかしその刃が契に届く事は無い。

体を全く無駄の無い動作で背後に逸らした事により、鼻の先を掠める刃。

その刃が軌道を修正して再び襲い来る前に警棒で握った腕ごと叩き落とす。

と同時に、右膝がアンジエの右手首を狙い跳ね上がる。

例えるなら鉄。

槌子の原理が導く結果はアンジエの手からナイフが離れるか、もしくは手首が碎けるか。

しかしどちらも願い下げだったのか。

アンジエは一度ナイフを手放し、右手を自由にすると同時に、警棒で弾かれた高速で回転しながら落下するナイフを器用に掴み取る。下手をすれば左手の指が無くなっていてもおかしくは無い、無茶をする物だと冷静に観察する。

アンジエはフリーになった右手で此方が不用意に上げた右膝を取ろうとするが、その手を振り下ろした警棒を跳ねあげ払いのける。

小指に当たった際微かな手ごたえを感じるがアンジエの嬉々とした顔色が変わる様子は無い。

痛覚を感情で塗りつぶしているのか。

勝負を決めるには相手の意識を一撃で刈り取るしかない。

次で決める。

そう決意し、一度距離を取った契に対してアンジエはそうはさせるかと距離を詰めて来た。

攻守の入れ替わりを感じ取った契は、ただその一撃を待った。

左手に持たれたナイフによる素早い突きの連続を躲し、いなし、受け止め続ける。

小ぶりの攻撃の連続に反撃の隙は見つからない。

防戦一方の硬直状態が続く中、契はチャンスを待ち続けた。

そして、そのチャンスがやって来る。

これまでで一番際どいコースを狙った突きをギリギリの所で受け止めた直後、その突きは引かれる事無く契の警棒を押しした。

大の大人の力と比べても遜色の無い力で押され、契が体全体の筋肉に力を入れた瞬間だ。

人は力を入れる際に体が一瞬硬直する。

その硬直を狙った、目で追いつけない程のスピードを持った足払いが来る。

契はその足払いに掬われてバランスを崩した　かに見えた。

それは恐らくアンジエから見れば絶好の隙だっただろう。

だが、不意に足を掬われるのと、覚悟した上で足を掬われるのではその意味合いや効果は全く違ってくる。

それに気づかずアンジエは逆手に持ちかえた必殺の白刃を完全に不可避なコースで契の心臓に振り下ろした。

だが、次の瞬間その嬉々としたアンジエの顔は二度目の驚きに染まる。

体勢を崩した人間に対しての完全な不意打ちとして振り下ろされた刃は、倒れる最中、警棒を投げ捨てた契の二本の指に受け止められたのだ。

刃を完全に挟み取ったまま背中からコンクリートに倒れた契は刃を離さない。

元より足払い後の無理な体勢で振り下ろされた刃にはスピードは

有っても重さは無かったのだ。

ナイフを掴んでいた指を素早くアンジエの右手に持ち替えそのまま腕を引く。

腕を引かれたアンジエは正面から契に引っ張られる形になる。

体の重心が根元から持つて行かれる感覚。

柔道技で言うところの巴投げの形だ。

だが此処は広い畳の上ではない。

距離を取った際、契は壁際まで移動し、自分はそれを追いかけた。必然的に迫る目の前の壁に、死を予見する。

頭からこの勢いでコンクリートに叩き付けられれば死に至ってもおかしくはないダメージを受けるだろう。

だが恐怖は感じない。

それは感情を奪われたからとか、そういう物では恐らく無い。

なぜなら今の自分には怒りという感情すらも存在していなかったからだ。

ただ存在するのは、開放感だった。

生きている、なんてあの日から実感した事なんて無かった。

先程までは。

そして先程久々に感じた。

私は生きているのだという感覚。

それは先程既に自分が死を無意識に受け入れていたからかもしれない。

光が闇の存在により初めて自分の存在を実感できるように。

これでもう、楽になっていいのかな。

解放感に抱かれたアンジエは迫りくる死に期待すら抱いていた。

だが、契の右足で鳩尾を支えられ、投げ飛ばされる形、その寸前。契の碎けたはずの左腕が伸び、アンジエの襟を掴む。

そのまま投げられ、必然的に頭ではなく、倒立した状態で背中からコンクリートに強く打ちつけられ、更に続く鳩尾への重い衝撃。

それは巴投げの姿勢のまま後転した契の爪先だったのだが、そんな事は知る由も無い。

そうしてようやく、アンジェは意識を手放したのだった。

第一幕 最終章 『無力』 (前書き)

このお話はフィクションです。

実際にいる人物、団体、企業、国家、その他もろもろは一切関係ありません。

第一幕 最終章 『無力』

さて、今回の騒動の一連のまとめを綴ろうと思う。

入学式の二日前となったあの夜。

結果として獅子の配役を演じたのは俺だったという事になるだろう。

追っ手の三人の内、息が有ったのは二人。

残念ながらお手製手榴弾を二つ（・・・）仕掛けてあった部屋の入り口のトラップに掛かったジーニーという男は出血量から明らかに手遅れであった。

何より肺を貫通された状態で数十分の間放置されていたのだ、生きていくはずもない。

これは俺がもう一般人には戻れない所まで来た事を示す。

まあどちらにしる彼等は二度目の任務失敗の責務を取らされる形になったのだから、遅いか早いかの問題ではあったのだろう。

だからだからと言ってその罪が消える訳ではない。

俺は殺すべくして殺した。
であるならそれ相応の責任を持って一生を生きるのが責務というものだ。

まあその責務を負う覚悟はトラップを仕掛けた時点でとうに済ませていたので今更何か綴る事は無い。

それよりも残りの二人の処遇に付いてだが、感電により気を失っていたトロイという名の男、彼はその場に放置した。

ただでさえ証拠隠滅に回収および埋没が必須の品が数え直すのも面倒な程あったのだ。

その処理を右腕一本で行う労力を考えると男の回収なんてしている暇は無かった。

まあ、端的に言えば面倒だっただけなのだが。

目を覚まされても面倒なので用意してあったロープで簀巻きにし

て工場の中に転がしておいた。

因みに回収物の中で爆発物は一つのみ。

不発した（・・・）手榴弾だ。

工場中に爆薬を仕掛けたと言うのは当然ながらブラフだった。

胸元にそれらしく装着していたのはただの光るだけの玩具だ。

件の手榴弾に関してはやはり信用性の薄い外国サイトを参考にした上、それも元は玩具の入れ物で造ったのでは確実性と威力に問題のある物が限度であるようだ。

これは今後の課題として考えておかなければならない。

だがそのお陰で結果的に上手くいった事もある。

何せ貴重な契約者を殺さずに済んだのだ。

自分の事ながら契約という事象に関しては分かっている事の方が多い。

さて、その更年期障害さながらのヒステリー女だが、ロープと針金でこれでもかという程ぐるぐる巻きにしてテイクアウトした。

縄と針金分の重さを含めても大した重さでは無かったが、右腕一本で巢巻きの少女を抱えて歩く姿をご近所の皆様に見られなかったのは幸いだった。

もつと言えばあの爆発音で近隣住人に警察を呼ばれなかったのは本当に僥倖だった。

流石に相手が国家権力様ではそうそう出し抜けるとも思えない。

そういえば述べるべき事は他にもあったな。

どうして俺が、あの人間離れした怪力女を圧倒出来たのか。

種を明かせば単純だ。

俺に、人の心を読むなんて力は無かった。

いや、正確には契約で得た力はその力では無かったと言うべきだろうか。

俺が得た力は簡潔に言えばそう、理解力だ。

具体的に言えば、相応の実力、理解を持った人間が記した書籍、また口述という形でも可能らしいが、その内容を即座に実行可能な

レベルで習得する、というもの。

その習得レベルはそれを記した人間の實力や、記された文章の具
体性により変化する。

アンジエとの衝突で見せた見切り、太刀捌き、体捌きに関しては
希理子の家で見つけた指南書によって習得した物だ。

あの人外レベルを相手に通用するレベルだったのだからあの書を
記した人物はよほどの實力者だったのだろう。

つまり実戦で使用してみるまではその力がどれほど実用性を持っ
かがわからない、一種の賭博の様な力なのだ。

また学園内でアンジエの投擲をかわして見せたのは読心術の図書
を数冊読みあさったお陰だ。

読心術とは端的に言えば、主に相手の視線、また仕草や拳動から
相手の初動から行動、心理状態を探るいわば見切りに近い物であり、
使用できる状況というのは相手を正面に見据え視線を合わせた状況
のみだ。

またそれは統計学的な視点から類推される物であり之もまたギヤ
ンプル要素であると言わざるを得ない所がある。

統計学は一般人を基準とした視線を主眼に置かれた物に成るので
ああいっただ色物を相手取る場合など特に運の要素が強くなる。

それを踏まえた上で言うのなら、俺が今こうして五体満足で居ら
れるのはただただ幸運だったからと言うしかないのだ。

結果とは最後に出る物であり、最後に出るとは限らない物である。
結果論とも言えるべきそれは運命論とも言い変える事が出来ると

俺は考える。

つまるところ、この世はやはり運を味方につけた者の勝ちという
事だ。

その点で言うなら、あの女もまた、不発という幸運を勝ち取った
勝者であると言っても良いのかもしれない。

さて、大変面白くない結論を強引に持論から決定づけた所で現状
を語ろうと思う。

まずは皆様どうでもいいと感じるであろう自身の状況を敢えて先に語ろうと思う。

左腕尺骨及び橈骨複雑骨折、肘関節脱臼、右腕手根骨及び右足腓骨亀裂骨折、各所筋肉の断裂。

結果から言えばトレーニング不足といった所だろうか。

あとは適度なカルシウム摂取程度の事しか思いつかない貧困な発想に我ながら辟易する。

アンジエの蹴りを受けた部位が全く骨折なしヒビが入っていると云うのは少々笑えない話だと思うが、左腕以外は放っておけば治るだろうと医者に言ったら小一時間唾を飛ばされながら説教を喰らうハメになった。

ちなみに何故こうなったと聞かれて階段から落ちました、と答えたら言いたくないなら良いんだと言われた。

どうやら骨折でこの言い訳を使う人間が後を絶たないようだ。

次からは別の言い訳を考えようと思う。

そういえば、入院となれば入学式に参加する事が出来なくなってしまうため、何とか医者を説得しようかと思っていたのだが幸いその心配は無くなった。

偶然とは何と恐ろしい物だろうか、希理子も契約者だったのだ。

薄々予感はしていたので実際には大して驚きはしなかったのだが、希理子の力は治癒能力という、失礼ながら何とも都合主義な素晴らしい力で、左腕以外の亀裂骨折に関してはものの五分も立たずに完治した。

まるで契約者のバーゲンセールとも言うべきこの現状は、やはりリンが原因となっているのだろうか。

よくよく考えてみれば、俺が倒れているのを見つけて即救急車を呼ばず自宅に連れ帰るといふ時点で人とは何か違う物を持っていると気付くべきだったのだ。

というか、自宅で輸血など出来る筈も無く彼女の力が無ければ俺は今頃出血多量で死んでいたかも知れないと言われては押し黙り感

謝の意を述べるしかないと言う物だ。

ちなみに希理子はその力を得るに至った理由や、代償に支払ったモノに関しては一切語られる事は無かった。

本人曰く、秘密は多いほうが女は輝くモノだそうだ。

リンの前で語られたその格言による弊害はまだ発生していないがきつと近いうちにリンが俺の質問に簡単には答えなくなるであろう事は容易に予測できた。

そう、希理子に関して分かった事と言えば、希理子は俺より二つ年上で、その上俺が入学する予定である私立高校で来年三年生を迎えるというのもお互いを驚かせた。

まあ家が近くてそこその偏差値というだけの理由で選択した高校なのだから家同士が近ければ同じ高校を選択して居ても不思議は無い。

さらに言えばさして都心に近い訳でもないこの街に高校が数えるほどしかない、と言うのもこの偶然の要因となっているだろう。

次にリンに関してだが、ひとまずは予想通り、黒服の仲間を見る事は無くなった。

どうやらアンジエを退けられたのは某組織にとっても予想外の事態だったらしい。

こと一対一の戦闘に於いてアンジエを退けられる人間は組織にはほぼ存在しなかったらしく、そのあたりが彼らの足を踏み留まらせている原因となっているのだろうと予測している。

ちなみに希理子の家にアンジエを抱えて帰宅した時には朝焼けが空を蝕み始めた時間帯だったのだが、まずリンが起きていた事に驚いた。

リンと共に出迎えてくれた希理子に話を聞けば朝早く起きたのではなく寝ていなかったのだと言う。

家に荷物を取りに行ったという建前を出かけていた俺は右肩に担いだ大きな荷物と明らかに不自然に垂れ下がった左腕をどう説明しようと考えている内にその小さな体からタツクルを受けた。

何事かと思う間もなく、そのまま大声で泣きだしたリンの頭を撫でながら、自らの下した判断が本当に正しかったのかどうか考えなおす羽目になった。

結果としては恐らく正しい判断をしたのだと思う。

だが、方法は他にもあったのではないか、正直に伝えた上で待っていて貰うという手もあったのではないかと考える。

しかし良く考えれば、結局このような結果は避けられない物だったのだと確信し、過去を考えるよりこれからリンの機嫌をどう取るのかを考える事にしたのだった。

ちなみにそのまま泣き疲れて寝てしまったリンは俺が病院から帰ってきてから暫くして目覚め、それからずっと俺と口を聞いてくれない状況が続いている。

まあようはどう機嫌を直して貰うか、未だに考え付いていないというわけだ。

何よりそれを考える前に、既に目覚めてこれもまた年相応と言える様な仏頂面で巣巻きにされたまま横たわっているアンジエから話を聞きだすのを優先してしまった。

見かけの不機嫌さによらず、聞かれた内容には素直につらつらと答えるアンジエを気味悪く想い、

「気持ち悪いな、もう少し噛みついて見せたらどうだ。」
と言ってみた所、短く死ねとの返答を頂いた。

これだけ人の体をぐしゃぐしゃにしておいて良くもまあこんな口が叩けるもんだなと希理子に声を掛けたら、呆れた笑いを返された。さて、この呆れ笑いはどちらに向けられた物なのだろうか。

一先ずアンジエは希理子宅の使われていなかった部屋に放り込んで、今情報を整理しようと思いついている状態に至るというわけだ。実は先程アンジエを二階の空き部屋に放り込んでから二階から成りやむ事の無い床をドスドスと叩く音が聞こえている。

あの巣巻き状態で一体どうやって床を叩いてるか知らないが蟻に襲われる芋虫のように悶える怪力女の姿を想像すると普通ならば胸

が高鳴るのを抑え切れないのだろうと察する。

しかし残念ながら俺に女が悶える姿を見て悦に至る様な趣味も感情も存在しない。

大変残念な事だ。

それにしてもしつこい。

十分間はあるして騒音を立て続けているのではないだろうか。

それはまるで生理的現象をもよおした子供のような。

ふむ、そういえば彼女を縛り付けてから既に半日は経っている。

希理子がいくらなんでも可愛そうだからと水分や食事は与えていたようだが、下世話な話、お花を摘みに行く時間を与えた覚えがない。

まずったか？

アンジエを放り込んであった部屋に向かうとどうやら手遅れではなかったようで、待っていたのは廃人と化した大人しい少女では無く、臨界寸前の某エネルギー炉の様に顔から煙を上げていると錯覚しそうな程怒り浸透な怪力女だった。

「おいっ糞！！ほどけ！！ほどかねーと後でどうなるかわかってんだらうな！舌嚙んで死ぬぞ！！？？！　　？　　以下自主規制。」

想像通りに放送禁止ワードをこれでもかと散りばめた罵詈雑言を吐き散らすアンジエを見て居るとやはりこう、なんだろう。

犬に餌を与える寸前、犬が尾を向ける程フェイントを繰り返すような、悪戯心と言う奴だろうか。

「ふむ、どうやら部屋を間違えたらしい。」

俺は無表情のまま、おっと失礼と言わんばかりに目の前の犬に逆に尾を向けた。

「待て！待てクス、いや契！」

「おかしいな、俺は節足動物門昆虫綱鱗翅目の幼虫、つまるところ芋虫に名前を教えた覚えなど……おっとすまん、これはこれは、アンジエじゃないか。余りに様になった蠢き様で一瞬気付かなかっ

た……おやどうした、幼虫の真似を止めて次は歯医者 of 順番待ちの真似か、そんなに歯を食いしばっては閉口筋が発達しすぎて折角の綺麗な顔のバランスが崩れてしまうぞ。そんな筋肉を鍛える暇があるならもう少し丁寧の人に物事をお願いする方法から学んだ方がよりこれから生きるためになると思うんだが。」

「てめえ……欲しい情報あらかた絞り取っておいてその仕打ちかっ！第一アタシにもう反抗する意図はねえって言ってるだろうが！どうせアタシは組織に戻ったら即海の底だ！」

「ふむ、もう一声といった所だな。」

世間ではいふドヤ顔とはいまの俺のような顔を言うのだろうか。いやまあドヤ顔と言ってもそれはいつも通りの無表情なのだが、きつと正面で転がるこれにはさぞ腹に据えかねるドヤ顔に見えてくる事だろう。

「……くそっ、アタシはアンタに生かされてるようなもんだ、アタシはアンタにそれを感謝するつもりは無い、けどそれはそれこれはこれだ。アンタに借りがあるのだけは紛れも無い事実だ。だからアタシがアンタや希理子やチビツ子に手を出す事は無い。」

こいつが怒り以外の感情を取引に力を手に入れたのは既に聞いた事項だ、その上でこんな事を口にするのは余程怒りを抑えつけた上での事だろう。

瞳を閉じて語る姿からもそれは察する事が出来る。

次の言葉を少しだけ待つか、必用は無いと言わんばかりにそれ以上は黙りこむアンジエ。

「まあ、及第点だな。」

ロープを解いてやるとアンジエは出来る限り焦りを見せない様だが可能な限り足早に廁へ向かった。

扉を閉じる所まで本来は見届けるべきだったのかもしれないが、女性の用足しの音を敢えて聞こうとする程俺も不躰ではない。

今更何を言うと思われるかもしれないが、結局の所、俺はアンジエを既に信用しているのだ。

自ら過去に鍵を掛けた者同士として、という少し慣れ合い的な意味に感じられるかもしれない。

だが意味合いとしてはどちらかと言うと同じ穴のムジナという方が近い。

類似する種の生物がお互いを利用し合う関係、言ってしまうえばそんな所だろう。

そんな油断を突かれ、戻って来たアンジェから心ばかりのお返しとばかりに自殺を促す暴言と蹴りを頂いた。

「死ねっ！」

に加えてローキックだ。

自分の力を考えてやって欲しい物だ。

初発を避けて追撃を警戒するがそれは徒労に終わった。

「何だ、廁の外装が気に入らなかつたのなら俺ではなく希理子に文句を言え。」

「……はああ……いや、確かめてみただけ。」

その後、溜め息を吐きながら肩を落としてベットに座り込んだアンジェがぼつりと零した五文字ばかりの言葉は四畳半の部屋で俺の耳に意味を持って届く事無く消えた。

その言葉は彼女の怒り以外の感情を孕んでいた気がするが、その予感を信じるには、俺は少々捻くれ過ぎていたのだろう。

希理子の自宅である大屋敷の離れ。

そのリビングは古式日本風庭園の雰囲気を損なう事の無い蘭草の香立つ畳敷きの一室だ。

だがその雰囲気に圧倒的違和感を持って馴染む小さな体躯が一つ。両足を体に抱え込み、膝に顎を乗せぶすーとした面持ちで大し

て面白くも無さそうに見詰めるのは今では目にする事が希少になったブラウン管式テレビ受像機に映された料理番組だ。

無駄にテンションの高い司会が叫ぶ品の無いジョークに笑いを振りまくのはブラウン管の向う側で、カンニングペーパーの指示通り動く観客席だけのようで、その画面の前に坐すたった一人の銀髪の少女はピクリとも反応しない。

ちなみに家主である希理子は夕飯の買い物に出かけているし、アンジエは恐らく二階で眠っている。

さて、俺はこれから今回の騒動で最後の仕事完遂させなければならぬのだが、俺にとって下手をすればこれが最も難易度の高いミッションである可能性がある。

「……リン。」

名前を呼ぶが全く此方を振りむく様子はない。

実はこれが三度目の呼びかけとなるのだが、どうにも進展がないまさに冷戦状態と化している。

無視される度、別のやらなければならぬ事に逃げて時間を稼いでみるのだが、先程のアンジエの一件で既にやる事は尽きた。

背水の陣という奴だ。

浅く息を飲み、リンの考えているで有ろう事を予想し最善手を選び取って言葉にする。

「リン、お前に嘘をついて一戦交えに行っただのは済まなかったと思ってる。だがリンと一緒に連れて行く事が出来ない状況だったのも譲る事の出来ない事実だったという事を理解して欲しい。」

三度の呼びかけに沈黙を守っていたリンがその言葉にピクリと反応する。

手ごたえを感じた俺は言葉を続ける。

「どうか許してもらえないだろうか？」

ゆっくりと歩み寄り、頑ななその肩に手を置いた。

だがその反応は予想していた物とは到底かけ離れた物だった。

パシッ。

乾いた音を立てて払われた手から、眼の前の少女の瞳を見る。

その瞳の端には薄らと涙が浮かんで居て、整った相貌の中で残る幼さの残る薄い唇は堅く結ばれていた。

それは必死に泣くのを堪える、その歳の少女相応の顔だった。

俺はその顔を見て、他に考えていた口上を完全に忘れてしまう。

何も言えないでいる俺に、随分と久々に聞いた様に思える声は、

何時ものような硝子細工の鈴の音の様な音では無い。

その声は明確に怒っているとわかるそれ。

「……………どうしてっ、どうしてそんな事言っの？」

リンはそのままの勢いで、俺が茫然と差し出していた袖をあらん限りの力で引いた。

「それは……………」

「違っっ！」

俺の言葉を遮って言葉は続く。

「わかってるもんっ！お兄ちゃんがそうした理由も、そうしなきゃいけないかった理由も！！」

俺はただ黙って言葉を聞いた。

「でもっ……………、でもっリンが怒ってるのはそうじゃないのっ！だっ
てお兄ちゃんは、お兄ちゃんはリンのせいであんなになっただん
よ！？あんな、ボロボロになって……………それでもリンに優しくしてく
れて……………そんなの……………そんなのっ……………」

小さな瞳から溢れる涙は頬を伝い、顎の輪郭を覆う銀の髪を濡らす。
それでも、言葉を発する事が出来る様に、ただ伝える事が出来るよ
うに、顔をくしゃくしゃにして歯を食いしばる。

「だっつて、だっ……………て……………、リンが、リンが怒ってたのは、リンにだ
もんっ……………！お兄ちゃんのお家に勝手に転がり込んで、一生懸命護
つて貰って、でもリンは何もお兄ちゃんに反してあげられないっ。」

俺は悟った。

ああ、俺は何て馬鹿な勘違いをしていたんだろう、と。

リンがまだ小さい少女だからと完全に見くびっていたのだ。

眼前に立ち、零れ落ちる涙もお構いなしに歯を食いしばる少女の、なんと立派な事だろう。

自分が達観しているだって？

とんだ自惚れだ。

こんな小さな女の子の気持ち一つわかってやれていない。

「リンが…、リンがそんな事でいじけてる時に、またお兄ちゃんは優しく自分が悪いって言うの……そんなの、そんなの違うよ……」
決壊した感情からポロポロと大粒の涙を流すリンを俺はしっかりと抱き寄せて、頭を撫でてやる。
泣き顔を見られまいと必死に俺の肩に顔を押し付けるリンに対して、いま言えるたった一言だけの言葉を、もう俺には残っていないはずのありたっけの感情を込めて零した。

ありがとう、と。

第一幕 最終章 『無力』（後書き）

第一幕はだいたい完成してあるからさくさく更新します（キリッとか言っていたわりに実はラストを書いておらず毎日の更新、という訳にも行きませんでした、なんとかこうして一先ずの最終話を皆様にお送りする事が出来ました。

誤字脱字だらけの上、文法上の間違い等みつけて行けば数え切れない様な修行不足な文章ですが、お付き合い頂け感謝です。

お話はこれからエピソードを経て第二幕へ続きますが、ひとまずは第一幕を読んでくれた数少ないながらも皆様に心からの感謝の意を表したいと思います。

ほんとうに、

ありがとうございます。

第一幕 『えびろーぐ』（前書き）

この物語はフィクションです。

実際にいる人物、団体、組織、国家とは一切関係ありません。

第一幕 『えびろーぐ』

およそ五メートル四方程の部屋をたった一本の蠟燭が照らす。

蠟燭を乗せる金の燭台は臙気な橙の明りをより色濃く反射している。風も吹かない締め切られた部屋で蠟燭の炎を揺らすのは、その部屋の持ち主と部屋に招かれた一人の人間の吐き出す重苦しい空気だけだ。

一人は燭台の置かれた豪華なデスクに肩肘を突いて薄く微笑みを浮かべ、その正面に案山子の用に棒立ちさせられた一人の男は緊張の余り顔に通常のものとは違う、やけに粘り付くような汗を浮かべている。

「それで。」

坐した男が束の間の沈黙を破りそう切り出すと、一瞬ビクリと体を震わせて対面の男が顔を強張らせる。

「まんまとうちのエース級を敵に奪われて、眼の前に目的の御子が居ると言うのに指を啜えたお預け状態……というわけですか。」

言葉口からにじみ出る優しさに反した、凍てつくような圧力に押され、対面の男は何か言いたげに口をモゴモゴと動かし、結局それは言葉に成らずに胃の腑へ飲み込まれる。

「何か言いたい事があるのならお聴きしますよ?」

圧倒的に純粋な悪意で持つてそう問われ、息を吐いた対面の男は、見た目だけならもう五十は疾うに過ぎている。

対して坐した男は凜々しく若さの残る青年だ。

だがそんな見た目はこの場の圧倒的力関係を表すに何の影響も及ぼしはしない。

常に放たれる雰囲気、オーラが、既に別格だった。

「はあ、まあ私もそこまで貴方達に期待なんてしていませんから、別に首で持つて償えなんて事は言いません。」

そう言われふつと対面の男の表情が緩んだ瞬間、その表情は即座に

凍りつく事になる。

「　　ただ、確か上役が下の責任を取るとというのが人間界では常識でしたよね？」

爽やかな、全てを凍りつかせる様な微笑を浮かべて、坐した男は言う。

「心配しないでください、命までは取りません。ああでも、もし、シヨックであなたの心の臓が止まったりした時は、私の責任ではありませんから……。」

其の日、同じ建物に居た全ての人間が、男の断末魔を聞いた。

幸い命を失うまではいかず、だが彼が部屋から出て来た時、その頭髪は灰や黒が微妙に混じり合った、見る影も無い白髪と化していた。

そして先程の部屋で一人正面を見据える青年は呟いた。

我慢我慢、と。

第一幕 『えびろーぐ』（後書き）

あっはっはは。

笑ってもごまかされませんね、文章量を見てお気付きの方もいらっしやるかもしれないませんが、3日でこんだけ！？

はい、若干忙しくてさぼってました。

あと人物相関図とかこの後の話の展開とか一切考えずに第一幕をノリと勢いだけで書ききってしまったために起きた弊害であるとも言えます！

未熟でさーせん！

第二幕 『Prologue』（前書き）

さあやつと始まりました、第二幕！！一番、先頭に行くのは本作主人公契！2番先頭に続くのはサブヒロインと呼んでいいのか渚希理子！

おーっと！！3番アンジェを追い抜いて詰めるのは…！詰めるのは…！！

4番 ネタバレの為自主規制 ！！

つそして虎視眈眈と後方で一位を狙う今作期待のロリ枠リン！！
ここが最後尾だと思われた、が！！！！その後ろにはっ…！！？

本作をお読み頂いている皆様、見事なまでの糞茶番でした。
本当にごめんなさい、そしてありがとう。

おまけ この物語はフィクションです（以下省略）

第二幕 『Prologue』

三寒四温のローテーションが運良く後者に当たった今日、私立狗ヶ峰学院の入学式が予定通り四月の頭に執り行われている。

桜並木に挟まれた多少長い坂を登った小高い丘に広がる敷地からは街を一目で見渡せる上、築後およそ十年程という小奇麗な校舎と、私立特有の自由な制服デザインが人気に箔を付け、今年の入学試験で結構な倍率を誇った名門校である

新入生を迎える晴天と暖かい風、舞い散る桜の花弁、ここ数日の非現実的数々の出来事が嘘のようではないか。

余談だが、狗ヶ峰というのはこの学校の名称であると同時に、学校が構えられたこの小高い丘いや山といふべきなのかは定かではないが、それ自体に付けられた名前でもある。

そのためご近所では結構な知名度を誇っており、この周辺に住む子供なら大抵が狗ヶ峰を進路の一つに選択するという噂だ。

またこの学校の特徴として、入学試験として行われる独自のテスト問題のレベルが全国的に見て割と高い位置にあるという事があげられる。

また通常の高校と変わらず特色化選抜やAO入試等でも少数の生徒を募集しているが、その面接や作文、求められる内申たるや、中学での期末学年順位が三十位を常に越えるような生徒でも合格は五分と言われている為、毎年そちらの選抜では一桁台の生徒しか入って来ない。

さて、閑話休題。

何だこの視線は。

入学式が取り行われる体育館を目指し、親と共に、入学前からの知人と、また一人で、という各々の形で歩みを進める人々。

その大多数がチラリないしジーンと俺を見ては歩幅と歩行速度の差により視界後方に消えて行く。

特に女子生徒の視線が若干多い気がするのは気のせいではないだろう。

ふむ、今日もこなした日課のランニング後にはしっかりとシャワーを浴びて来ている。

体臭が不快であるという理由ではないだろうし、入学式に左腕を白布で吊っていると言ってもここまで見られる様な事では無いだろう。ふむ、と無表情な顔で考えていると聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「あつ、いましました、契さん」

おっとりとした声で少し離れた所から此方に手を振っているのは、入学式前随分と世話になってしまった女性であり、俺と同じ契約者である所の渚 希理子だ。

しかしゆっくりと此方に歩いてくるその姿には少なからず見覚えがあるのだが、希理子より少し背が低く長めのポニーテールを尻尾の用に揺らす見覚えの無い女の子が一緒に隣に並んで歩いてくる。

「ご入学おめでとございます、契さん。」

何時も通り途中まで三つ編にされた柔らかく緩やかにウェーブの掛かる髪を束ねて左肩から垂らしてふわふわと揺らし、ブルーのアンダーリムフレームの眼鏡越しに向日葵の様な笑顔を振りまく希理子。それに比べ隣を見ると敵愾心としか言えない感情をむんむんと漂わせこちらを睨む見知らぬ女の子。

「三年生は始業式からだっと思ったんだが、大分早く来てるんだな。」

面倒事の匂いを察して完全に視線を無視しそう答える俺に向け更に強い敵意が送られてくる。

「ええ、私実は生徒会に所属しているんです。だから入学式からの参加なの。まあそれはおまけみたいな物で、本当は契さんに入学のお祝いを述べるために少し早く家をでてきたんですけど。」

笑顔を増す希理子に反比例して不機嫌さを増量させこれでもかど押し出してくる女の子が無視しきれない雰囲気溢れさせている。

まるで噛みついて来いと言わんばかりだ。

「ふむ、それは礼を言わんと、わざわざありがとう。それで、その隣のちっこいのは妹か何かか？」

と、口走った瞬間それは沸騰した。

「だ…だ、誰がチビだ誰がああああああああああああ

何て沸点の低い子なんだろう。」

その背丈からは考えられない様な大声を上げて隣の女の子が切れる。

「さつきからオレの希理子に慣れ慣れしくしやがって、先輩相手なんだからケイゴを使え敬語を！それにオレは妹なんて歳じゃねえ！これでも高校三年だっつーの！」

それはそうだと俺は語尾を正す。

「ふむ、そのチビっこい背丈で高校三年生ですか、ちゃんと栄養は摂取していますか？俺も最近痛い目に有いましたから、毎日カルシウムを欠かさず取る様にしていますよ。」

「だからチビっつーんじゃねーよ！触れんな！もうそこに触れんなつばかばかばーか！！だいたいお前の栄養事情なんて聞いてねーし！ねーし！」

「ふむ、うちのリンとアンジェを足して二で割った様なお方ですね。言う事が若干正論を含んでいる点を除けばですが。」

「言葉使いなら私は別に気にしませんよ？」

微笑む希理子と切れる少女、まるで対極な二人を見て何となくその関係性が理解できた気がする。

「紹介が遅れてしまいましたね、彼女は狗ヶ峰 優ちゃん、私のお友達兼仕事仲間といった所です。そして彼は夜永 契さん、春休みの少し前に知り合ったお友達です。」

希理子の親切な紹介を聞いてその苗字に引つ掛かりを覚える。

狗ヶ峰、紛れもない地名姓であるのだが、問題はそれがこの学校の名前と同じである事だ。

無表情な俺の顔から何を悟ったのか希理子が補足を加える。

「苗字を聞いてわかったと思うけれど、優ちゃんはこの学校の理事長のお孫さんなんです、あと生徒会長も務めているんですよ。」

「それで希理子が副会長つてわけだ、わかったか後輩！わかったら口でクソたれる前と後にサーと言え！」

「Sir, Yes Sir。」

随分と海の香のする口上に、つい複数いる心の恩師の内の一人を思い出して返事をしてしまう。

「ふざけるな！大声出せ！タマ落としたか！」

「さて、悪ふざけはこの辺りにしておかないと入学式で生徒会長が遅刻なんてしたら両生動物のクソ扱いを受けますよ、狗ヶ峰先輩。」

「ンだよ、折角ノつて来たつてのにー、つて！のわー！もうこんな時間かつ！おい希理子急ぐぞ！」

「優ちゃん！そんなに走ったら転びますよ？それじゃ、契さんまた後でお会いしましょう。」

そういつて軽く手を振り笑顔でとととと会長を追いかける希理子を見る。

「ふむ、飼い犬の面倒を見るのはやはり何処でも大変な様だな。」

と、家に留守番させてきたリンとアンジエの事を思い出しながら、俺は体育館への道を小走りで進むのだった。

塗布されたニスとワックスがまだ真新しい床材が天上の証明を程良く照り返し、多様な面持を浮かべる新入生の顔を下から照らしている。

大多数は真つ直ぐ壇上を見つめる者、点在する隣とこそそと囁き合う者、堂々と眠りこける者など各自様々な構えを持って入学式典は進んでいった。

生徒会長、式辞。

行事的でいて少し優しさを持たせた様な声の司会の生徒、生徒会副会長である希理子の声がスピーカーを通して体育館内の空気を余すことなく振るわせる。

新入生男子の一割程の視線が先程からその司会席と壇上を行ったり来たりしている。

左肩から垂れた黒髪を持ちあげるあのボリュームと母性的な笑顔に魅せられた男子は少なく無いようだ。

そんな観察を行っていると、無駄に喧しい、ダンダンダンツツという足音と共に、先程の小さな少女、狗ヶ峰 優が舞台袖から姿を現した。

そしてスタンドマイクの設置された演説机の前に立つ。

「ふむ……。」

思わず漏らした呟きは体育館内のざわめきにかき消された。

それはまるで、晒し首の様だった。

まあただ単純に背が低くて演説机から頭しか出ていない様に見えるというだけの話なのだが。

舞台袖から役員と思わしき生徒が一抱え程の踏み台を持って音も無く演説台にかけ寄り、すぐさま折り返して舞台袖に消えて行った。

「ゴ、ゴホンツ。」

ようやくその平らな胸から上がこちらから見えるようになり、少々顔を赤らめた我が校の生徒会長はワザとらしく咳払いをひとつ。

そして顔を上げ、此方を見渡した生徒会長の顔にもう戸惑いは感じられなかった。

「新入生っ！まずはおめでとうつつつといてやるよ！」

なるほど、生徒会長というのも伊達や酔狂でなれた物では無いな、と実感する。

語り口は多少乱暴ながら恐らくはマイクが無くても体育館中に聞こえるであろう、リンとした声。

堂々と全体を見据える迷いの一切感じられない強い意志を持った

瞳。

それらから醸し出されるオーラはまさにカリスマと言うべきか。

「お前らの中では、ひとまず高校受験が終わったからって安心してる奴が少なからずいるだろうと思う、けどな！その気持ちで居ていいのは、これまでだ！オレはそんな気持ちで入学してきて、落ちぶれていった奴を何人か見てる！中学の頃は勉強が出来た、けど高校に入ってズルズルなんて奴、そこらを探せば数え切れないくらいいやがる！そういう奴らは大学受験を前に、大学に入って、就職の時に、絶対に後悔してる！だがその時はもう手遅れだ！そんなお前らは今そういう奴らが居る事を知った！だから知らなかつたじや済まされない！大切なのは各自が、常に眼の前に何か目標をぶら下げておく事だ！お前らはまだヒヨッコだ！眼の前のニンジン目がけて走る馬になれ！そんなような事を続けてりゃ、そのうち気付いたら自分の意思で走れる様になつてる！オレが保証してやる！」

礼儀などクソ喰らえ。

圧倒的に独善的なスピーチに先程まで顔を伏せていた生徒や話していた生徒、よそ見をしていた生徒、残らず、一人残らず、今は壇上を見つめている。

「さあて、厳しい話はこれくらいにしといてやる！長つたらしいスピーチなんて校長だけで十分だっ。」

張り詰めていた空気が彼女の突然の笑顔の一言でさっと崩れ、全体から笑いが零れる。

教員席に座った校長ですら苦笑いを浮かべつつ、だが信頼した視線を壇上に送っている。

「この学校は楽しいぞ！自由で、何よりも生徒の意思が尊重される！勿論好き放題やっていい訳じゃねーぞ？責任を負うのもまた自分自身だ。けどな、その中で、自分のやるべき事、やりたい事、楽しめる事を見つけれたら、それをどれだけでも追及できる三年間はお前らにとって忘れられない物になる！間違いなくな！」

優はそこで一息ついて、新入生の顔を見渡した。

そして、うん、と頷いて顔を上げる。

「不安な顔も、わくわくしてる顔も、楽しそうな顔もそれぞれだ！ だけどお前ら一人残らずいい眼してるぜ！」

勿論の事、実際に全員の瞳を見た訳ではないはずだ。

だが彼女の言葉と表情には、生徒達を活気づけ、勇気づける様な何かを感じられた。

「三年間、精一杯楽しめよ！！ 以上だ！」

敢えてマイクを切って叫ばれた最後の声はやはり想像通り、体育館中どころか、恐らくは生徒の心の中にまで響き渡り、盛大な拍手を背に彼女は舞台袖に消えて行った。

こうして閉会の辞に伴い新入生総勢一二〇名が、新たにこの学校の生徒として迎え入れられたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1173y/>

きーどあいらっく！

2011年11月8日02時04分発行